

●特集テーマ：「環境デザイン教育」

1. インダストリアルデザイン分野における
環境デザイン教育…………… 1
2. 都市のり・デザイナーを育てる…………… 5
3. 多摩美術大学…………… 9
4. 居住環境学科
—金沢工業大学の新設学科—……………12
5. 大阪府立大学……………14
6. 名古屋市立大学芸術工学部……………17

7. 札幌市立高等専門学校……………21
8. 女子美術大学……………23
9. 「土木工学科における景観・デザイン
の教育—東京大学の場合—」……………26
10. 神奈川大学……………28
- 第10期定例総会……………30
- ブロック例会レポート……………32
- お知らせ……………35
- 事務局より……………36

特集：環境デザイン教育

今回は「環境デザイン教育」を特集のテーマに取り上げることにしました。

なぜ、1980年代に入って「環境デザイン」「環境計画」「環境造形デザイン」といった学科やコースが増えたのでしょうか。従来のような“エリート”デザイナー教育は今後どうなるのでしょうか。このような時代の流れのなかで従来の学部や学科での都市環境デザイン教育は、どのように対応しているのでしょうか。それらの現状や工夫、あるいは問題提起などを、現場で教育に携わっておられる方々に執筆していただきました。

なお、簡単なアンケート調査も実施させていただきました。本文中で触れられている方もいらっしゃると思います。設問内容は以下の通りです。

- 1 貴校の環境デザイン教育に関わる部門の正式名称は何ですか。
- 2 講座の理念や教育方針はどうなっていますか。

- 3 上記講座の発足年と新設・改設の理由をお教えてください。
- 4 教授・専任教師・非常勤講師などの内訳はどうなっていますか。
組織図があればお送りください。
- 5 カリキュラム（1年次、2年次、3年次、4年次、大学院）と学生数は？
- 6 施設、設備、スペースは？
- 7 貴校の特筆すべき環境デザイン教育内容は何ですか。
- 8 改良点や問題点などがありますか。
- 9 卒業生の進路・就職先の分野や傾向についてお教えてください。
- 10 あなたは21世紀の環境デザイン教育はどうあるべきだとお考えですか。
- 11 先生の専門分野、研究テーマ、主たる著作などをお教えてください。

（編集担当：中嶋猛夫、松村みち子）

特集 1

インダストリアル デザイン分野における環境デザイン 教育

森田 昌嗣
MORITA YOSHITSUGU
九州芸術工科大学

1. 九州芸術工科大学の概要

本学は、1968（昭和43）年4月、国内初の芸術工学を掲げる国立大学として1学部4学科（芸術工学部、環境設計学科・工業設計学科・画像設計学科・音響設計学科、各学科30名、計120名）体制で開学した。1977（昭和52）年、大学院芸術工学研究科に生活環境専攻及び情報伝達専攻の修士課程2専攻が設置され、1993（平成5）年には、同大学院博士課程が設置された。また、1997（平成9）年度の学部改組に

伴って、芸術工学部に芸術情報設計学科が加わり1学部5学科体制（学部定員210名）となり現在に至っている。（図1、写真1、2参照）

本学は、「技術の人間化」を標榜し、技術の基盤であるところの「科学」と、人間精神の最も自由な発想であるところの「芸術」とを統合し、その全体的な精神によって、技術の進路を計画しその機能を設計する、高次のデザインを確立することを基本理念としている。

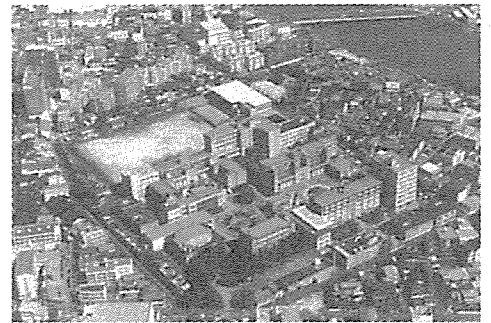
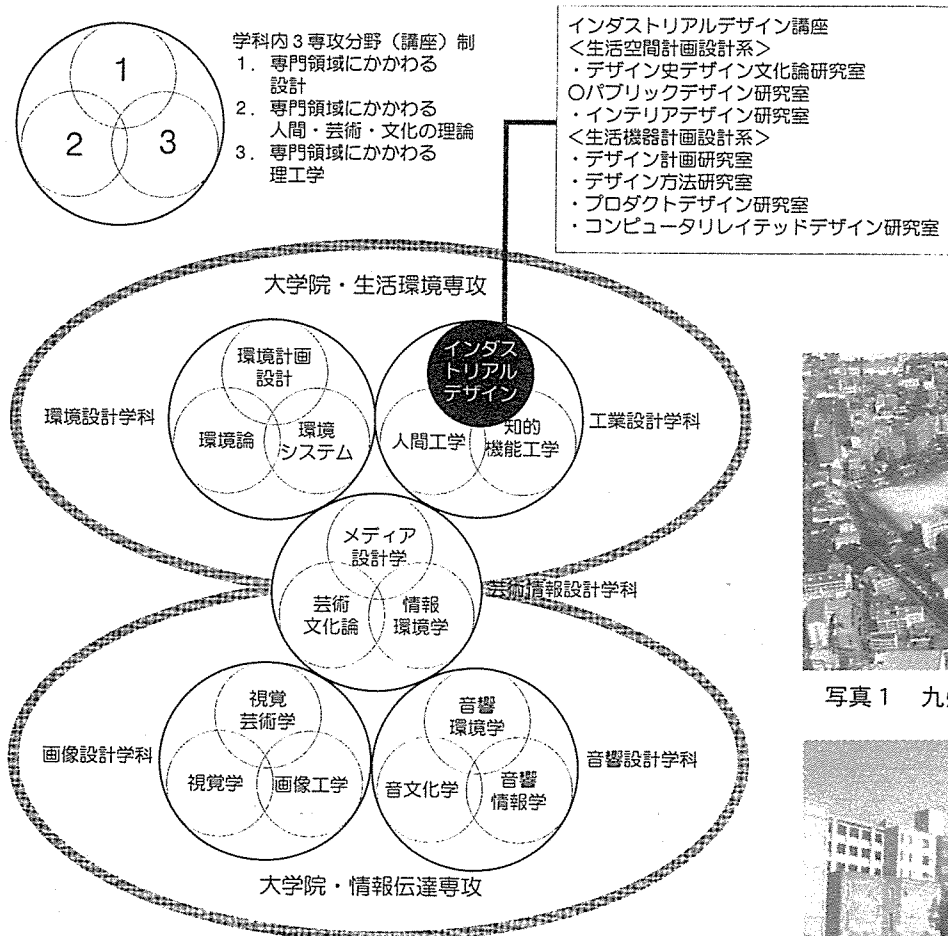


写真1 九州芸術工科大学 全景



写真2 九州芸術工科大学 キャンパス

図1 九州芸術工科大学の教育・研究体制(2000年度)

2. 開学後創成期の状況

このような理念の基に、デザインの専門大学として開学した当初、人とモノと環境の関係を捉える生活環境のデザイン分野として環境設計学科及び工業設計学科が用意された。環境設計学科は、既存の都市計画、建築、造園の分野を統合し、環境から人とモノへアプローチする設計学科として、国内でも最初といえる環境デザインの名称を冠に据える学科が用意された。一方、工業設計学科は、それまでの工業デザインに特化した学科とは異なる、既存の機器デザイン、空間デザインのデザイン分野に人間工学及びデザイン論を含め、人とモノから環境にアプローチする設計学科として用意された。このことは、大学院において、学部での環境設計学科と工業設計学科を含めて生活環境専攻に位置づけられていることから、大学院でより専門分野に細分化される当時の他大学院にはない独自の構成であったといえる。

このような理念の基に開学されたが、環

境設計学科、工業設計学科共に、そこで教育・研究を進める教官達は、当然のことながら、それまでの既存分野で活躍されている方々であった。特に、60年代末から70年代の高度経済成長の最中、デザインの分野でも専門分化による質的先鋭化が推し進められていた時期でもあり、分野を横断する本学における生活環境のデザインの考え方が学内を始め社会でも認識されていない時期であった。各教官は、これまでの既存分野の専門知識を教授し、学生が芸術工学として、これらの内容の相互関係を模索する。そのために、複数の分野にまたがるカリキュラムを4年間で習得することが求められた。その結果、生活環境を幅広く捉える視野は養えるものの、各専門別には、どうしても内容の薄いものになる傾向が強くなり、当時の学生達は、就職や進学の際に理解されないなど、多くの障害が生じた。例えば、環境設計学科の場合、就職や進学の際に、環境デザインが理解されていないために、都市計画、建築、造園のどの分野が専門なのかを問われたり、ましてや工業設計学科

における環境デザインのアプローチを理解してもらえる場面はほとんどないのが実情であった。

3. インダストリアルデザイン分野における環境デザイン

本学に大学院が設置されていないこれらの時期には、関連する大学の大学院、例えば東京大学、東京芸術大学、千葉大学、東京教育大学、京都工芸繊維大学などに多くの学生が進学した。著者も、開学5年目の1973年に本学の工業設計学科に入学し、空間デザイン専攻を卒業した一人である。大学で学んだ理念と合致する場所を求め、人とモノから環境をアプローチするインダストリアルデザイン分野を有する東京芸術大学大学院の環境造形デザイン専攻に進んだ。その後、デザイン事務所（現在のGK設計）に入社し、約13年間環境デザインの実務に携わった。この実務経験の80年代から90年代初頭の期間、公害問題から端を発した生活環境への関心の高まりや景観事業の拡大など、環境デザインの取り組みが活発化した時期であった。インダストリアルデザイン分野に端を発する環境デザインの実務は、都市サイン計画やストリートファニチュア計画などのアーバンエレメントを中心に、橋梁等の構造物計画から街路計画、地区計画へと展開していった。これらの実務経験で著者は、都市計画、土木、造園などの従来から都市環境の計画設計分野における環境から人とモノへアプローチする方法以外にも、人とモノから環境へアプローチする、言い換えればモノづくりの発想から環境デザインするインダストリアルデザイン分野の都市環境の計画設計の方法が存在することを認識したことである。特に、アーバンエレメントなどは、単体が小さな要素でしかないが、街路や広場などの公共空間に数多く設置され、群として都市環境形成に影響を及ぼしており、それらの大半が工業製品である。わが国のインダストリアルデザインの実績は、家庭電化製品や車など消費財とされる私的資産の製品が質・量ともに国際レベルに達しているが、アーバンエレメントなどの公共財・景観財と呼ばれる社会資産の製品に関しては、ヨーロッパなどの先進諸国と比べるとレベルが低い。このようなことから著者は、具体的なプロジェクトを通して、都市環境のデザインには、都市計画や土木、建築、造園など空間計画設計を主体とする分野と、インダストリアルデザインのように質の高い要素の計画設計を主体とする分野とのコラボレイトの必要性を再認識した。また、大

学や学会、協会などでの都市環境の空間計画設計に関する研究活動は、多くの人材による継続的な蓄積があるが、インダストリアルデザインを始めとするデザイン分野での都市環境の要素計画設計に関する研究活動の歴史は浅く、大学などの研究機関が少ない。

4. 九州芸術工科大学パブリックデザイン研究室の現況

1992年、著者は、出身大学である九州芸術工科大学へ着任する機会を得た。九州芸術工科大学は、前述したように開学以来標榜している学際的芸術工学研究の理念を掲げている。そこで、着任に伴い、それまでの工業設計学科の空間デザイン分野に、都市環境を対象とするパブリックデザイン研究室（写真3参照）を新設した。パブリックデザインの呼称は、東京芸術大学大学院の恩師である稲次敏郎先生、並びにGK設計代表の西澤健先生を中心に、環境デザインの総称として「パブリックデザイン事典」を編纂するなど、デザイン分野において提唱された用語である。著者は、大学の一研究室としてパブリックデザインを用いる際に、本来の広義の意味ではなく、人・モノを主体に環境との関係を研究する立場で使用している。言い換えれば、インダストリアルデザインにおける環境デザインアプローチを中軸においた研究室として位置づけている。著者が担当する授業科目は、学部がインダストリアルデザイン概論での生活空間計画設計、パブリックデザイン論、デザイン演習、卒業研究など、大学院でのパブリックデザイン特論、生活環境特別演習、生活環境プロジェクト研究などである。特に講義では、工業設計系の学生以外にも環境設計系の大半の学生、他学科の設計系の学生が多数受講しており、パブリックデザインや環境デザインに対する関心の高さや専門領域の拡がりを実感している。

パブリックデザイン研究室は、発足して8年が経過している。その間、学部生、大



写真3 パブリックデザイン研究室ゼミ風景

表1 九州芸術工科大学大学院生活環境専攻パブリックデザイン研究室修士論文リスト

修了年度	修士論文題目	氏名
平成6年度	都市生活におけるバリアフリー環境形成に関する基礎的研究 A Fundamental Study on Barrier Free Design for Urban Environment	安 英珍 AHN Youngjin
平成7年度	都市内主要街路における公的サイン類の分布特性に関する研究 A Study on Characteristics of Public Signs in Urban Main Streets	古賀 健一 KOGA Kenichi
平成8年度	バス停留所の構成要素に関する研究 A Study on the Constitution Elements of Bus Stops	佐伯 謙吾 SAEKI Kengo
	都市環境装置の製品化に関する研究ーボール系(車止め)の製品特性について A Study on Public Product Design of Urban Environmental Installation-Product Characteristic of the Bollards	崔 乘日 CHOI Seung-il
	都市内主要街路における行動特性に関する研究 A Study on the Human Behavior in Urban Main Streets	土井 誠博 DOI Nobuhiro
平成9年度	住宅地における街区公園の構成要素に関する研究 A Study on the Design Elements of the Square Park in a Residential Area	田中 敏雄 TANAKA Toshio
	ストリートアメニティ形成のための街路景観エレメントのあり方に関する研究 A Study on Design of Streetscape Elements for Street Amenity	千代田 憲子 CHIYODA Noriko
	都市内公的空間における地域情報メディアのあり方に関する研究 A Study on Design of Regional Information Media in Urban Public Spaces	白名子 信 HINAGO Shin
平成10年度	自動販売機の設置環境と利用行動に関する基礎的研究 A Fundamental Study on Relationships between Setting and People's Behavior of Vending Machines	土肥 亮馬 DOHI Ryoma
	市民参加によるまちづくりのための地域メディアのあり方に関する研究 A Study on Design of Regional Information Media for Community Planning on Public Involvement	松熊 修吾 MATSUKUMA Shugo
平成11年度	地区内移動のためのバリアフリー環境構築のあり方に関する研究 A Study on Barrier free Design for Mobility in a Town	大橋 勝 OHASHI Masaru
	放置自転車等の駐輪特性に関する研究ー福岡市天神地区をケーススタディとして A Study on the Characteristic of Illegal Bicycle and Motorcycle Parking-A Case Study at Tenjin Area in Fukuoka City	清水 博文 SHIMIZU Hirofumi
	歩行者の休憩と街路空間形態に関する研究ー福岡市中心市街地の主要街路を事例として A Study on Relationship between Restspaces and Street Patterns for Pedestrian -A Case Study of Pedestrian Space on Main Streets in the Center of Fukuoka City	濱武 加奈子 HAMATAKE Kanako

学院生への教育・研究を本務に、対外的には、公共空間やアーバンエレメントに関連する自治体や企業との共同研究や計画・設計及び開発に携わっている。著者並びに研究室の一貫した研究テーマは、公的空間とその構成要素“Public Space & Elements”の関係を探る“都市環境装置デザイン方法”を掲げている。特に、大学院教育においては、表1の昨年度までの修士論文の一覧のように、都市環境装置研究を中心に進めており、その延長での地域情報化研究、バリアフリー研究、市民参加型まちづくり研究などに取り組んでいる。

昨年度までの7年間にパブリックデザイン研究室では、学部の卒業研究生60名、大学院博士前期課程(修士)修了生13名が卒業している。卒業生の進路は、例年、学部から大学院への進学が1~3名、就職では、公共財・景観財メーカーや住宅設備メーカーなどの開発設計・デザイン部門が多く、また大学院生を中心にアーバンデザインやランドスケープデザインに関連した設計事務所に進んでいる。特に、アーバンデザインやランドスケープデザインの設計事務所においては、モノづくりの立場から環境デザインにアプローチする面が評価され採用されるケースが多く、研究室の方針が認識され始めているといえる。本年度は、学部4年次の卒業研究生が10名、大学院博士前期課程7名、博士後期課程3名、研究生5名が在籍し、その内、韓国と中国からの大学院生5名、研究生4名の留学生が含まれる。九州は、地の利からアジア圏の

留学生が多いが、特に本研究室は、今年度、韓国との都市環境装置デザインに関する共同研究の依頼があるなど、最近のアジア諸国での環境デザインへの関心の高まりが留学生の増加の要因となっているものと推測される。また大学院は、社会人入学制度があり、現役のプランナーやデザイナー、他大学教員の方々からの問い合わせが増えており、来年度には博士後期課程在学者が3名となる予定である。

以上のように、九州芸術工科大学パブリックデザイン研究室は、インダストリアルデザイン分野における環境デザインの教育・研究を進め、人・モノから環境へアプローチする環境デザインの一つの方法として、また一領域として位置づけるために、国内並びにアジアを視野に入れ今後とも研鑽を重ねる所存である。

著者概要<森田昌嗣, もりた よしつぐ>
所属:九州芸術工科大学芸術工学部・教授・博士(芸術工学)「街路における都市環境装置デザイン方法に関する研究」,専門領域:パブリックデザイン(都市環境装置デザイン),学会等:日本デザイン学会理事,芸術工学会理事,都市環境デザイン会議員,他,賞:日本サインデザイン大賞・通産大臣賞2回(GK設計時),グッドデザイン賞金賞,日本デザイン学会研究奨励賞,他,委員等:グッドデザイン賞審査委員,福岡県・福岡産業デザイン賞審査委員長,福岡市環境基本計画推進委員会委員,他

都市のり・デザイナーを育てる

鳴海 邦碩
NARUMI KUNIRO
大阪大学大学院

澤木 昌典
SAWAKI MASANORI
大阪大学大学院

◆はじめに

私たちの所属する研究室（「都市環境デザイン学領域」）は1969年に「環境計画学講座」として創設されている。本稿では、研究室の30余年の歴史と時代背景等を振り返りながら、今後の環境デザイン教育についての私たちの現時点での考えを述べることにする。

◆「環境」の老舗としての環境工学科

当研究室の所属する環境工学科は、1968年に「自然、生産、生活全般にわたる調和ある環境の維持と創造を図るために、環境全体を把握する学際的な対応のできる技術の研究開発と総合型技術者の育成」を理念に新設された。従来の工学分野の枠を越えた学際性を特徴としたユニークな学科であり、全国の大学で初めて「環境工学」という名前を冠した学科であった。

当時の日本は高度経済成長の下で、公害問題の発生など、都市や地域の環境にさまざまなひずみが生じつつあった。本学科はそのような環境の危機を回避して、自然界から人間社会にわたる調和ある環境を維持する技術が必要であるという社会的要請を背景に成立したのであった。

◆「環境計画学講座」から「都市環境デザイン学領域」へ

当研究室は翌69年に同学科を構成する6講座の一つとして開設された。同学科では環境の基本的な構成要素を「空間」「大気」「水」ととらえた。そのうちの「空間」を計画する部分を担当するのが当研究室であった。その目的は、「住居から地域まで、人間の定住環境の構造を物的・制度的に明らかにし、その計画、管理および評価に関する教育と研究を行うこと」である。この目的の下に、住環境理論・都市計画理論・地域計画理論の基礎的な研究・教育や都市デザイン手法の研究・教育、都市や集落空間の国際比較研究などを展開してきた。

1998年4月、環境工学科は大学院重点化のための組織改革によって「環境工学専攻」となった。学部では基礎教育を、大学院では専門教育を重点的に行うという位置づけである。この改革に伴って、当研究室は名称を「都市環境デザイン学領域」と改め、以来、都市環境に関する環境デザインを研究・教育することを前面に掲げている。

◆都市環境デザイン学領域の目指すところ

当研究室が目指すところは、以下のとおりである（学生募集パンフレットより）。

『都市環境デザイン学領域では、人びとと環境の関わりをみつめ、住みよい住居、暮らしやすいまちや地域、魅力をもった都市を造り出していくためのさまざまな研究を行っている。地球規模での環境問題や、21世紀に向けて都市のり・バージョンの課題が強く認識されている今日、都市環境デザインには、人間環境をり・デザインする役割も期待されている。』

人間環境は、歴史的、文化的、地域的な存在であり、工学的ないし科学的に分析された知見を基礎としながら、人間の〈感覚〉を重視しつつ、総合的に取り組まれるべき対象である。そこに〈デザイン〉が果たすべき真の役割があり、デザインとは単に美的に環境を装うことではない。』

研究内容としては、1)住環境のデザイン（集住環境の構成手法、住環境形成に重要な影響を与える人間のライフスタイルやコミュニティに関する研究）、2)都市環境のデザイン（都市に魅力と活力を与える環境の構成手法、市民・企業・行政の連携による都市づくりの仕組みに関する研究）、3)自然環境の保全と創造（都市と自然との共生のデザイン手法の研究、自然環境保全を目的とした土地利用コントロールに関する研究）の3つを中心に、人間と環境との関わりを総合的にとらえる中で環境デザインに携わることのできる人材（ジェネラリスト）の育成を目指した教育を行っている。

◆都市デザインの社会的認知と20世紀の都市が残す課題

こうした一連の研究・教育活動の成果として、鳴海を中心に他大学・機関の研究者やプランナーからなるいくつかの研究会を通じて、都市デザインや景観行政に関する数冊の著書を上梓してきた。主なものをあげれば、

- ・1981年『都市デザイナー理論と方法』（都市デザイン研究会、学芸出版社）
 - ・1988年『景観からのまちづくり』（鳴海編、学芸出版社）
 - ・1990年『都市デザインの手法—魅力あるまちづくりへの展開』（鳴海・田端修・榊原和彦編、学芸出版社）
 - ・1999年『都市のり・デザイナー—持続と再生のまちづくり』（鳴海編著、学芸出版社）
- などである。

この間、時代は、最低の居住環境水準を充足するといったシビル・ミニマムの議論から、都市の魅力・アメニティを求める質的な議論、さらに地球環境問題も視野にい

れた環境共生時代の環境デザインへの議論と、その重点を移してきた。そうした中で「都市デザイン」という言葉は多くの専門家や一般の人々にも認知されてきたが、その一方で場所性や文化性・歴史性に欠ける「金太郎飴」的な魅力の乏しい都市空間を数多く創出してきてしまったというのが、20世紀後半の日本の都市の姿であろう。

◆デザインの概念とその重要性

私たちは「デザイン」という概念が来世紀においてもますます重要になると考えている。それは次の理由からである。少し長くなるが、前掲書『都市のリ・デザイン』の前文（鳴海）から引用する。

『デザインは、単に事物を美しく装うことに止まらない。デザインという概念には、様々な要素の組み立てを構想する、物事に形を与える、といった意味がある。それゆえ、建物を設計することもデザインであり、音楽の編成を構想することもデザインであるということになる。』

欧米では、21世紀の工学教育として、デザインが重要視されているという。これまでの工学教育は一つの正解を得ることに重点を置いてきたが、それでは創造力の育成に限界があるという認識である。デザインは多様な要素を組み立てることを前提に行われ、その結果には多数の正解がありうると同時に、その中により良いデザインが存在している。そうしたデザインを巡るトレーニングから、創造力が生まれることが期待されている。

こうして見てくると、まちづくりは人間環境のデザインである、ということに気付いてくると思う。人間環境は、工学的ないし科学的に分析し、システムとして抽象化できる対象ではある。しかし、そこから得られた知識のみでは、実体としての望ましい環境を構築ことはできない。なぜなら人間環境を構成する要素は極めて多様であり、かつ、文化的、地域的な存在であるからである。その意味で、望ましい人間環境を形成していくためには、デザインの観点からの取り組みが必要となってくる。

人間はこれまで、環境の特質を認識し、そこに人間の営為を加えて環境を形成してきたのだが、これをデザインという明確な概念に基づいて行ってきたわけではない。むしろ近年になって、環境をデザインすることの必要性が認識されてきたというのが正確である。

縦割り行政は相変わらず続き、民間にしてもなかなか従来の仕事の流れから脱却で

きていない。人材を送り出す大学の仕組みも同じような状況にある。そのような状況下で、新たな環境を巡る課題に取り組んでいくためには、共有できるキーワードが必要であると考えた。それが〈デザイン〉である。』

◆21世紀の環境デザイン教育

ー都市のリ・デザイナーを育てる教育

本年度の環境白書は、来世紀を「環境の世紀」と位置づけている。環境問題への対応が、都市空間においても、そこで展開される都市活動・都市生活にもより一層強く求められる時代となる。環境工学という広い視野と広範な知識を背景に、種々の専門家・専門領域をコーディネートしながら都市環境をデザインしていける人材を育成する場としての当研究室への社会的要請は、高まりこそすれ衰えることはないと考えられる。

そんな中でも、私たちは教育方針として、あいかわらず次のことにはこだわり続けていきたいと考えている。

- ・都市空間を人間の感覚そのままの尺度で見えていくこと
- ・生活と空間との関係をとらえる中から空間のあり方、生活のあり方を考えること
- ・場所に根ざした空間のあり方を考え、ローカルな現場からの発想にこだわること

等身大の人間とその存在にこだわることは、環境問題の解決を含めた環境デザインの原点である。そして、その人間が築いてきた環境は歴史的な存在である。

当研究室では、大学の立地している大阪や歴史的蓄積の多い関西地方をベースに、学生にはできるだけ実際の多くの空間体験をして、その空間への人間の関わりを理解してもらうように、いわゆる「町歩き（イメージ・ハンティングと呼んでいる）」を奨励している。また、調査プロジェクトへの参画等を通じて、プランナーや住民の考え方や関わり方を理解するように働きかけている。

都市のリノベーションが大きな課題として認識されている。これからの環境デザインでは、再構築や再編などリ・デザイン（再びデザインすること）が重要となるだろう。その意味で、都市のリ・デザイナーを育てるーこれが当研究室の目標である。

◆アンケートへの回答

1. 正式名称

大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻
環境デザイン学講座都市環境デザイン学領域

2. 講座の理念や教育方針

地球規模での環境問題や都市のリノベーションなどの課題に対応しつつ、「人間による環境への働きかけや解
釈・表現を重視した上で、人間の環境を構成する物的な環境（自然や人工的構造物）および非物的環境（政治、経済、法制度、社会、歴史・文化など）の両者の方向づけや調節を行い、人間環境のあり方を追求する」ことを理念としている。

デザインとは単に美的に環境を装うことではなく、歴史的・文化的・地域的な存在である人間環境に対して、工学的・科学的知見を基礎としながらも、人間の感覚を重視して総合的に取り組むことと位置づけ、そうしたデザイン素養を有する人材を育成することを教育の基本方針としている。

3. 発足年と新設・改設の理由

発足年は1969年で、その際の部門名称は「環境計画学講座」。1998年4月、大学院重点化のための組織改革に基づき、所属する工学部環境工学科が大学院工学研究科環境工学専攻へと改組したのに伴って改められた。

4. 教授等と担当科目

1) 教授 鳴海邦碩

- ・地球総合工学概論Ⅱ（1年）
- ・環境原論（2年）
- ・都市設計学（2年）
- ・都市及び地域計画学（3年）
- ・卒業研究（4年）
- ・地域計画学特論（院）
- ・環境工学特論演習Ⅱ（院）
- ・環境工学演習（院）
- ・環境工学ゼミナールⅡ（院）
- ・環境工学ゼミナールⅢ（院）
- ・環境デザイン学特論（院）
- ・環境デザイン学特論演習（院）

2) 助教授 澤木昌典

- ・住環境学（2年）
- ・住宅地計画（3年）
- ・情報処理演習Ⅱ（2年）
- ・環境設計製図Ⅱ（2年）

- ・環境工学基礎演習Ⅱ（3年）
- ・環境工学基礎演習Ⅲ（3年）
- ・卒業研究（4年）
- ・地球総合工学特論（院）
- ・住環境学特論（院）
- ・環境工学演習（院）
- ・環境工学特別講義Ⅱ（院）
- ・環境工学ゼミナールⅡ（院）
- ・環境工学ゼミナールⅢ（院）
- ・環境デザイン学特論（院）
- ・環境デザイン学特論演習（院）

3) 助手 松政貞治

- ・建築概説（2年）
- ・環境設計製図Ⅱ（2年）
- ・環境工学基礎演習Ⅱ（3年）
- ・環境工学基礎演習Ⅲ（3年）
- ・卒業研究（4年）

4) 非常勤講師

服部 保・長谷川弘直：造園設計（3年）

小林郁雄・井口勝文：まちづくり手法論（3年）

5. カリキュラムと学生数

① 1年：地球総合工学科定員160名

共通教育機構による人間教育、教養教育の一貫として、工学部学生の専門の基礎として数学、力学、物理／化学／生物学などの講義がなされている。また、地球総合工学概論Ⅱ（院）において、環境工学の学問的背景や領域をわかりやすく紹介している。

② 2年：同科内環境工学科目定員40名

人間環境の過去・現在・将来、工学的アプローチにおける人文的・社会的理念、環境工学の領域の課題、持続可能社会など地球市民的課題への対応などについて幅広く講義する「環境原論」のほか、原則として基幹6領域から2つずつの専門科目が必修科目として配当されている。また設計製図や実験を履修する。また、工学共通基礎科目として教科目が選択科目として配当されていて、工学技術の基礎を提供している。

環境原論

＜環境工学基礎専門科目＞

住環境学

都市設計学

環境設計情報学計画システム

社会環境システム学

基礎熱工学

熱および物質移動学

気圏環境工学

環境流体工学
環境化学
環境生物学
＜環境工学基礎科目＞
環境工学設計製図特・監
環境工学実験
情報処理演習特・監
環境デザイン概説（選択）
環境数理（選択）
＜工学基礎科目（すべて選択）＞
数学解析特・監・企
確率統計
電気工学通論特
数値解析
総合科目特・監・企

③ 3年（環境工学科目定員 40 名）

多くの選択科目を学生が自ら適正と志向に基づいて判断しつつ、科目を選択して受講する。明確なコースは設けられてはいないが、環境デザイン、環境システムのいずれかに特化して学ぶプログラム作成も可能であるし、逆にその両方を学んで環境工学のゼネラリストを目指すことも可能である。

環境設計工学（必修）
環境工学基礎演習特・監（必修）
都市および地域計画学
まちづくり手法論
住宅地計画
造園設計
環境音響学
建築構造計画特・監
建築計画総論
交通システム計画
空間および資源の環境システム学
環境熱工学
気圏環境動力学
水質管理工学
地球循環共生論
環境材料学
環境経済学
環境政策学
環境設備
気象学
環境医学
環境分析化学

④ 4年（環境工学科目定員 40 名）

4年次の学習は領域（研究室）に属しておこなわれる。

(内)大学院（環境工学専攻調整定員 32 名）

全ての科目を選択科目としている。

地域計画学特論
住環境学特論
空間構成論

設計手法論
地域資源管理特論
環境計画論
環境熱工学特論
空気調和計画特論
大気拡散論
空気浄化特論
環境生物学特論
水質管理工学特論
特別講義特（環境共生の諸技術）
特別講義監（環境の地域比較）
環境工学演習
ゼミナール

⑤ 当領域に属する学生数

4 年生	: 20 名
大学院前期課程 1 年生	: 10 名
” 2 年生	: 10 名
大学院後期課程	: 4 名
研究生	: 2 名

合計 46 名

6. 施設、設備、スペース

教官室 90 m²(3 室)
研究室 150 m²
設備はパソコンなど

7. 特筆すべき環境デザイン教育内容

前述のように、歴史的・文化的・地域的な存在である人間環境に対して、工学的・科学的知見を基礎としながらも、人間の感覚を重視して総合的に取り組むことに重きを置いていること。そのため、実際の町歩きや調査プロジェクトへの参画等を通じて、多くの空間を体験することや、計画者や住民のその空間への思い入れを理解できる人材を育成することを目指している。

8. 改良点や問題点など

領域（研究室）に所属する学生数が多いこと。これについては、配属のルールづくりなどで対応する予定。また、教育指導については、さまざまな形態のゼミ（専門別や内容の程度別など）や調査プロジェクトを設定して、学生が知識を吸収しやすく、かつ自ら進んで学んでいけるような工夫をしている。

9. 卒業生の進路・就職先の分野や傾向

主な進路は建設業（ゼネコン、設計事務所、住宅メーカー、関連企業）、官公庁・公団、コンサルタント、その他の企業（開発関連、コンピュータ関連）など。

大学院重点化により、4 年生の大半は進

学希望である。

10. 21世紀の環境デザイン教育

環境というのはそもそも相互的な関係を意味する言葉であり、そもそも「共生」という概念を含んでいる。したがって、環境を独立して考えるのではなく、「環境共生」としてとらえていく必要がある。こうした共生の関係は、「人間と人間」、「人間と自然」、「人間と技術」、「人間と（歴史性や機能をもった）それぞれの場所」において存在することが期待され、その結果として「人間が生き続けて」いけることが望まれる。

このような観点に立つと、環境共生という概念は、共生的 symbiotic、協同的 collaborative、持続可能的 sustainable、再生産的 regenerative、といった概念を併せ持ったものであると考えられる。21世紀の環境デザインは、単に狭い意味のデザインに止まるのではなく、上記のような概念をその根底にすえる必要があると思われる。

11. 先生の専門分野・研究テーマ・主たる著作など

1) 鳴海邦碩

・専門分野：都市計画、都市デザイン、

環境デザイン

・研究テーマ：都市デザインの理論および手法、市街地整備の理論および計画、集住空間の国際比較

・主要著書：『アーバン・クライマクス』筑摩書房(1987)、『景観からのまちづくり』学芸出版社(編著 1988)、『都市・集まって住む形』朝日新聞社(編著 1990)、(4)『都市環境デザイン(改定版)』学芸出版社(共編著 1998)、(5)『都市のり・デザイン』学芸出版社(編著 1999)

2) 澤木昌典

・専門分野：都市計画、環境計画、地域計画

・研究テーマ：居住環境と環境観に関する研究、自然と人工環境の共生手法に関する研究、地域性を重視した環境整備手法に関する研究

・主要著書：(1)『都市のり・デザイン』学芸出版社(分担執筆 1999)、(2)『都市デザインの手法(改訂版)』学芸出版社(分担執筆 1998)、(3)『世界都市再開発 NOW』学芸出版社(分担執筆 1990)

特集 3

多摩美術大学

松澤 穰
MATSUZAWA MINORU
多摩美術大学

環境デザインとは

「環境」を、「人間が知覚する外界」と定義し、その「環境」をデザインすること、それが環境デザイン学科の視野です。その対象範囲はきわめて広く、スケールの大小から見ても、ファニチュアやインテリア、住宅といった小空間から、公園、都市環境までをも含みます。さらに、目に見えないシステムまでもその対象となり、もはやその範囲はインテリア・建築・ランドスケープという分野・枠組を越えるに至っています。アート、テクノロジー、エコロジーを俯瞰する視点と自然環境、社会環境、文化環境などの的確な分析のもと、目の前に広がる世界をデザインするのが環境デザインです。

環境デザイン学科の視野

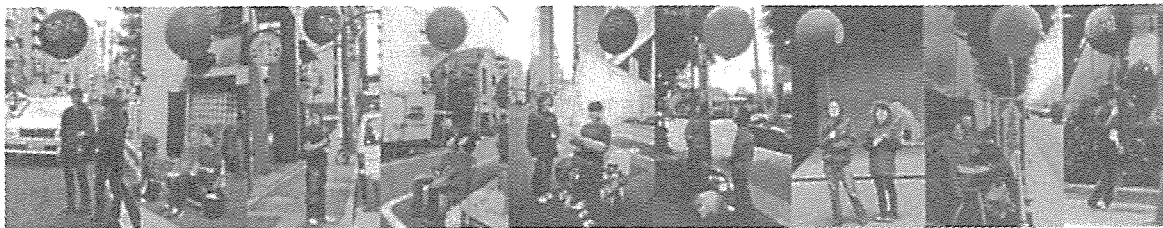
環境デザイン学科では、徹底的な現場主義、原寸主義と、CAD・CGを駆使したモニター上でのシミュレーションとの両面から、「手」で考え、ものをつくる、文字通り身をもって空間デザインの意味を学ぶことに重点を置いています。五感を研ぎ澄まし、素直に真っ正面から環境を受け止め、問題を見つけ、デザインに昇化していく。このプロセスにおいて、プロポーシオンやバラ

ンス、色彩感覚といった美学的要素のみならず、環境問題、リサイクル、エコロジー、バリアフリー等々の観点からの問題提起がなされ、答を見いださなくてはなりません。自分の専門分野に安住の地を見つける姿勢ではなく、今ある枠を常に疑い、違った視点から見直し、新たな問題を提起し、デザインによって解決する。環境デザイン学科ではその姿勢と、解決能力を養うことを主眼としています。これは、複雑なプログラムをコーディネートし、また新たな企画をプロデュースできるということでもあります。

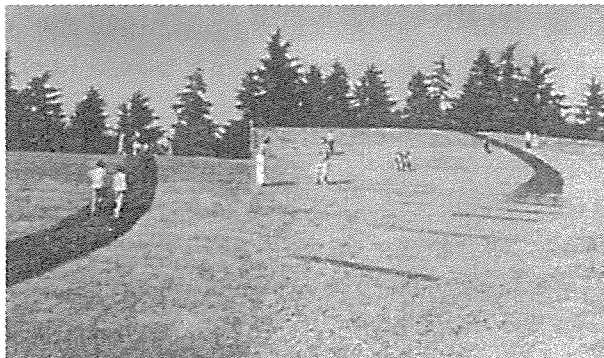
環境デザイン学科の4つの系

インテリアデザイン系

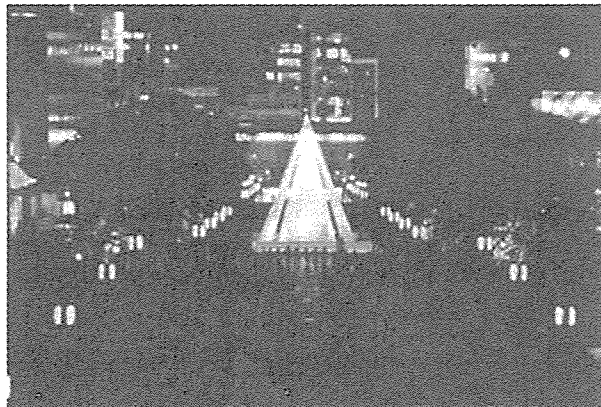
外部環境から守られた室内空間は、五感全てにおいて自由に開かれています。その構成する素材の可能性は、本学科の中で最も広いものです。身体に最も近い感覚 肌触り、色合い、音の響き、明暗、座り心地、居心地等をたよりに家具、空間演出、室内環境等についてデザイン室、工房、CAD室等を使いながらインテリアデザインを学びます。



バスストップ 依頼を受け企画・運営したイベント ディスプレイデザイン賞2000 入選



よみがえる樹々の命展 ディスプレイデザイン賞
依頼を受け制作した作品 2000 特別賞



センターランドツリー
依頼を受けデザイン・施工した作品



300人のデザインカンパニーとしてプロジェクトに参加していたメンバー

アーキテクチュラルデザイン系

建築とは、空間に秩序を与え、人々はこの空間によって秩序づけられます。この建築を、工学面からだけでなく、使う人間に優しい、本来のデザインの意味と、造形としてのアーキテクチュラルデザインを学びます。インテリアデザインはアーキテクチュラルデザインに包括され、ランドスケープデザインはアーキテクチュラルデザインを包括することから、この系はそれぞれを統合する役目をもっています。生活のデザイン、機能のプログラミング、プランニング、構造デザイン、ディテール、素材等について、図面、CAD、模型制作等の実技を通して学びます。

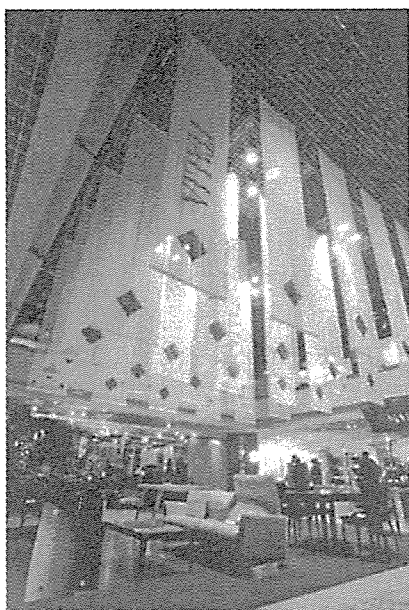
ランドスケープデザイン系

本学科の内容を最も大きなスケールでとらえながら、繊細な自然や都市の現象に敏感に呼応する感受性をもってランドスケープデザインを学びます。

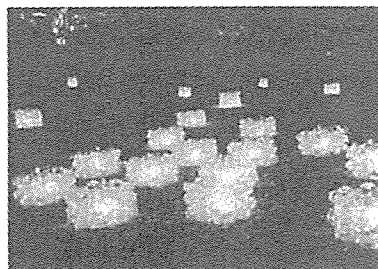
太陽の動き、月の明かり、風の薫り、水のゆらぎ、地形のうねり、土の重さ、石のバランス、木々のざわめき、そしてテクノ等、素晴らしい外界の諸現象の中にどのようなデザインが可能なのかを、戸外でのフィールドワークや実測や演習を通してランドスケープデザインを学びます。

オーバージャンル

オーバージャンルでは各自が課題内容=プロ



イタリア貿易振興会
依頼を受けデザイン・施工した展示ブース



暖氷 遠景（上）と近景（下）
依頼を受け制作した作品
ディスプレイデザイン賞2000 特別賞

グラムを作り、それを自由な発想によって構築し、表現することを学びます。与えられたものをただこなすのではなく、何をどう作り出したいのかを各自が独創的に組み立て、具体的なかたちにすることが大切です。内容はインテリア、アーキテクチャ、ランドスケープ、さらには都市構想と多様です。より自由で斬新な企画力を学びます。

環境デザイン学科に相応しい人

環境デザイン学科では「何とかデザイナー」や「何とかアーキテクト」なる肩書きに固執することなく、「環境デザイン」という、新たなデザインの分野に果敢に挑める強靱な意欲と実行力、指導力を持ち、かつ、光、風、素材、人の気配・・・それらの諸現象と向き合い、素直な感受性を併せ持った学生を求めています。

300 人のデザインカンパニー

学ぶ人たちは卵だとは考えていません。入学時点で既に世に生まれでて半人前にせよデザイナーなのです。至らぬ所は時としてチームワークが補い、教員がサポートを惜しまず、アクティビティが社会的に貢献する場面を提供しています。産学協同プロジェクトである「300 人のデザインカンパニー」はその姿勢の表明でもあり、実際数々の仕事を受注し始めています。例えば、岩手県安代町役場の依頼のサインポールをデザイン・施工をし SDA 賞を受賞致しました。昭和記念公園の依頼のランドアートプロジェクトをデザイン・施工し、ディスプレイデザイン賞 2000 の特別賞を受賞し、

東京デザイナーズウィークのイベント時のバスストップの総合プロデュースに対して、同賞入賞をいたしました。

多摩美術大学環境デザイン学科のホームページ

URL:<http://www.tamabi.ac.jp/kankyou/>
e-mail:kankyoutamabi@tamabi.ac.jp

アンケートの回答

1 正式名称

多摩美術大学美術学部環境デザイン学科

2 理念：本文を参照

3 発足年：1998 年 4 月

改設の理由：本文を参照

4 教授陣：

専任教員

毛網 毅曠
川原 肇子
戸井田 義徳
平山 達
樹野 俊明
森下 清子
山下 泉
渡部 一
田淵 諭
飯島 洋一
岸本 章
松澤 穰

非常勤講師

石川 清
大竹 誠
片岡 正次
木曾 康晴
木村 進司
栗田 融
小泉 誠
斎藤 欽弥
佐久間 治
J.F.リーバー
鈴木 解雄
高木 晃
高野 恵子
柘植 喜治
寺内 隆
富樫 克彦
松岡 宏吉
松崎 育弘
祐乗坊 進

5 カリキュラム

6 施設

工作工房、デザイン室、図書・資料室、CAD 実習室、AV 室、屋上テラスなど

カリキュラム (下図参照)

環境デザイン学科 4 年間の実技課題の流れ

- ・ 実際と一歩異なることもあります。
- ・ 社会とリアルタイムに対応し、プレゼンテーションしていく産学協同プロジェクトに積極的に参画していきます。

1 年
共通課題

光と空間を考える
光で空間を創る。
実際に制作した後、ディスプレイ・プレゼンテーションする。

自分の身体を考える
段ボールで身体を支える。
段ボールで実際に制作した後、展示・プレゼンテーション・出版まで行う。

自分とものの関係を考える
デザインサーベイ。一週間に有名人のインテリア・建築・ランドスケープを見学し、レポートする。

厚紙のスケールを考える
竹で空間を創る。大学内を敷地に、竹の切り出し・加工・施工・展示・解体・リサイクルまで行う。

2 年
共通課題

人々が集う空間を考える
デザイナーズレストラン。与えられた場所に店舗を企画し、設計する。

人々の身体を考える
大学内を敷地に、キャンパスファニチャーをデザイン・制作・設置する。

風景と人々の関係を考える
地をデザインする。

住まいを考える
多摩美術大学の教員の中から作家を選び、条件を引出し、その作家の住宅をデザインする。

3 年
専門系別課題

インテリアデザイン系

インテリアエレメントを考える
総合的に想定された場面のもとにファニチャーをデザインし、制作する。

インテリア空間の成り立ちを考える
インテリアにおける縦断なスケールと、空間の成り立ちをいくつかの小課題で学ぶ。

ものと空間の成り立ちを考える
ファニチャーや、照明器具を中心に空間をトータルにデザインし、生産・販売・流通といった社会の仕組みとデザイナーの役割を考える。

色と素材を考える
ディスプレイ、サインといった表層に相応し、素材や色を重点的に学び、実際に試してみる。

アーキテクチャルデザイン系

住まいを考える
住まいという行為を分析することから、空間をデザインする。

光と空間を考える
光を空間として考え、構造的で合理的な成り立ちを超えた空間の生成過程を学ぶ。

保存と再生を考える
様々な場所の歴史・記憶を読み解き、再生への可能性を探る手法を学ぶ。

都市を考える
多様性・複合性を伴った都市をモデルとしてだけでなく、ランドデザインの対象としての可能性を探る姿勢を身につける。

ランドスケープデザイン系

環境を知る
地形・気候・植生・景観の形、景の色といった総合的なイメージを学ぶ。

パブリックスペースを考える
伝統地区、再開発地域、ベイエリアなどの都市、里山、農地などの農村、それらにおける公共空間である広場、ポケットパーク、駅前、ストリートを考える。

伝統を考える
日本の美・美意識、空間への価値観を伝統から考え、デザインする。

素材を考える
石、土、砂、泥、水といった自然素材に金属、ガラス、プラスチック、窯業系の人工素材をランドスケープの視点から知る。

オーバーザンル

自由課題 その1

自由課題 その2

自由課題 その3

自由課題 その4

4 年
研究室別研究課題

卒業制作・卒業論文

修了制作・修了論文

大学院
修士課程・博士課程

居住環境学科

金沢工業大学の新設学科

水野 一郎
MIZUNO ICHIRO
金沢工業大学

1. 新設の学科

平成11年度（1999）金沢工業大学に「居住環境学科」開設の認可が下り、平成12年（2000）4月、123名の第一期生が入学してきた。

居住環境学科は建築学科と共に建築系に属し、人間居住の生活空間を対象にしているが、金沢工業大学においては他に環境系があり、環境アセスメント、水・空気・土の汚染、廃棄物、GPSなど対象にした環境システム工学科が設置されている。「環境」という言葉は多様なジャンルにおいて、それぞれ異なる意味で使われるので注意が必要である。

金沢工業大学では、2学科で1つの系をつくり、また2学科で5つのコア（コースに近い）を持っている。居住環境学科は主として環境計画と環境デザインのコアをもち、かつ、建築学科との共同分担で空間構築コアをもっている。環境計画とは熱環境、音環境、光環境、エネルギー、環境管理といった建築環境工学を地域・都市にまで拡げた分野。環境デザインとは地域計画・都市計画、景観計画、まちづくり、都市史といった居住空間のデザインを主とする分野である。

2. 設立の意図

近年、資源消費型から資源循環型への移行や、エコノミカルな価値観から生活重視の価値観へ、成長型の社会から成熟型の社会への移行が唱えられている。我々の分野で言えば高齢化に対応した社会のバリアフ

リー化、地球環境問題に対応した省資源、省エネルギーを含むサステナブルな居住環境、定住化社会に対応した快適居住環境形成などが要求されている。

現在、その要求に対応しうる学問分野としては「建築学」が最も適切と考えるが、それでも「土木工学」「都市工学」「造園学」「ビジュアルデザイン学」などの分野も学際的に吸収するような領域拡張が必要になってきた。

しかし建築学自体がすでに広すぎる領域を抱えている上に、土木や造園といったそれぞれが独立した体系をもつ専門分野を建築学にとりこむのも困難と考えられた。そこで建築学の中にある環境工学、地域都市計画の領域を中心に、土木、環境、人間、デザイン系の中の関連領域を積極的に取り込み統合的にとらえる「居住環境学科」という分野を設立することとなった。それはまさに都市環境デザイン会議（JUDI）がカバーしようとしている領域やメンバー構成とも類似していると思う。

時期的にも、「まちづくり」「環境形成」「街並み保存」「市民参加」「ハートフルタウン」「サステナブルコミュニティ」などといった建築学でも土木工学でもカバーしきれない、地域や都市のテーマが目白押しである。ことに北陸では金沢を始め歴史、風土、文化、産業、催事等に個性ある街が数多くあって、実践的にそれらと係わることが期待されている現状がある。このような社会的要請もまた、本学での居住環境学科設立のエネルギーとなった。

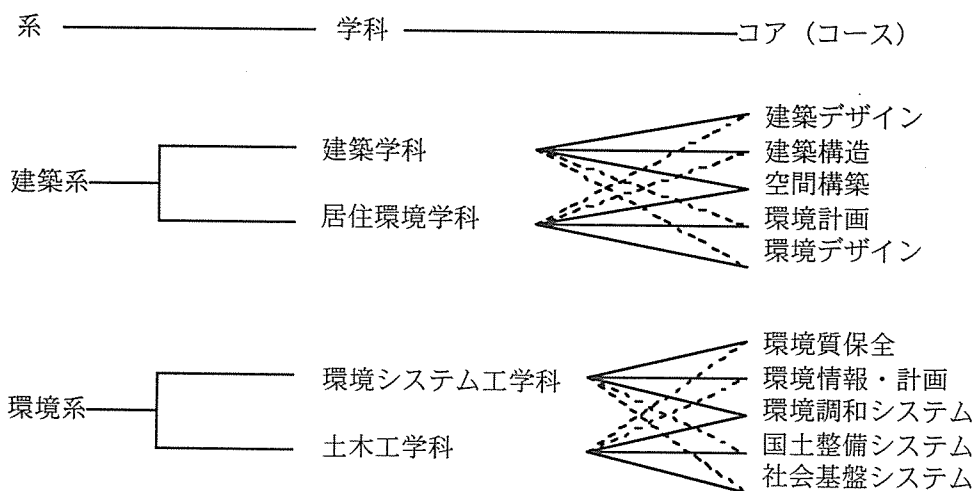


図 建築系と環境系の学科とコア（コース）のシステム

3. 教育、研究の内容

居住環境学科は3つのコア「環境計画」「環境デザイン」「空間構築」で構成されていることは先述した。

「環境計画」は、熱、音、光、空気等の性質と快適性を追求する一方で循環型の資源、エネルギーの技術やシステム開発の貢献をめざしている。具体的には建築環境工学や設備システムを軸に建築から地域・都市まで範囲を拡げようとしている。

「環境デザイン」はインテリア建築—まち—都市に至る一連の居住環境のトータルなデザインをめざしていて、学科新設の中心的コアである。

「空間構築」は主として2つの内容「空間構法」「空間メディア」を含んでいる。空間構法とは建築やまちを構築してゆく技術やシステムであり、20世紀のスクラップアンドビルドのフロー型から21世紀サステイナブル社会のストック型への転換要素を受けとめようとしている。そのために新たな建設技術だけではなくリフォームや解体リサイクルも視野に入れている。空間メディアとはIT技術に伴う、空間の創造、表現、伝達等の開発であり、今後急速に進展していくと思われる分野である。特にこれからはバーチャルリアリティなどの手法がまちづくりの討議に際しての表現手法として有効と予測している。

以上の3コアに応じた研究室構成とカリキュラム構成が組まれているが、まだ1年生しかない新学科なのでこれで良しと評価するわけにはいかない。研究室の多くは建築学出身だが、美術デザイン、都市工学、照明学の出身者もあり、将来的には造園学も取り入れたいと考えている。なお、都市環境デザイン会議（JUDI）のメンバーである森俊偉、谷明彦、水野一郎の3名は環境デザインの担当教授となっている。

本学の教育・研究内容のもう一つの特徴は建築学科と居住環境学科の関係である。建築学は一般的に建築計画（地域・都市計画含む）・建築構造・建築環境設備・歴史意匠などから構成されている。そうした一般から見れば、地域都市計画と建築環境設備の2領域が居住環境学科に移転してしまったので、両学科あわせた建築系が、建築学

の領域をカバーしていることになる。

従って、例えば一級建築士の受験に際しては両学科の科目を取得しておかねばならなくなり、両学科の学生は、基礎科目を共通に履修することになる。専門的なコアに分かれてゆくのは3年次からであり、所属コアの科目は必修、他のコアの科目は選択とすることで両学科に分かれた目的を達成させようとしている。

このように一卵性双生児的な両学科のカリキュラム編成はまだ1年生だけの進行なので、適正であるかどうかの判断はできないが、全体的にはユニークでかつ有効な編成になっていると考えている。

4. 「居住」という用語について

「居住環境」という言葉は、私たちにとっては人間居住のインテリアから都市に至るまでの一連の空間全体を指していると理解しており、「快適な居住環境」とか「サステイナブルな居住環境」という使われ方もマスコミ紙などによく登場していることから普及し、一般化しているものと判断していた。しかし、時折、高校生やその親、あるいは高校教師などが「インテリアや住の領域」という狭い捉え方をしているのに出会う。また「きょじゅう」と読まずに「いじゅう」と読む人もおられる。これには困っており、「居住環境学」という分野の認知をしてもらおうべく、努力しなければと話し合っている。

当初に記したように「環境」という用語は多岐に使用されているので意味を限定する必要から「居住」をつけた。JUDIのような「都市環境デザイン」としなかったのは「都市」という言葉が広域を示すかなり強い存在で、建築やその界限を含む身近な空間を置き去りにしてしまう感じがあったからである。他大学でも類似の学科があり、それぞれ苦心して名称をつけておられるが統一の言葉になっていない点は社会に対して認知されにくく、かつ、力量発揮の場が与えられる機会を弱めている意味で皆で反省せねばなるまい。

大阪府立大学

増田 昇
MASUDA NOBORU
大阪府立大学大学院

研究室の変遷

本研究室は、1955年久保貞先生が浪速大学（現・大阪府立大学）に赴任し、花卉学研究室内部に造園分野を設けたことから始まり1964年には農学部再編に伴い農業工学科が設立され緑地計画工学研究室として確立された。当時は、カリフォルニア大学バークレー校のランドスケープ・アーキテクチャー分野からガッレットエクボらを客員教授として招き、近代造園学への歩みを始めた。特に、人間と環境とは相互依存しているものであり環境での人間行動の客観的な把握と環境が人々に働きかける諸事実との関係をうまくオーガナイズするという環境行動学からランドスケープデザインにアプローチすることを中心課題としていた。一方社会では、1970年代に公害問題を端緒として環境への認識が高まるが公害問題の解決という個別のアプローチに限定されていた。80年代には、景観やアメニティという概念が着目されはじめる。これは個別的なアプローチに対して環境に対する総合的なアプローチの重要性が認識されはじめた結果と考えられる。90年代に入るとエコロジーという概念が加わり環境重視型社会への歩みが始まる。

このような社会的状況の中で、本学でも1994年に再び農学部が再編され農業工学科と造園学研究室・農業経済系2研究室（園芸農学科）を統一し、地域環境科学科が設立され、緑地環境計画工学（旧・緑地計画工学）と緑地環境保全学（旧・造園学）研究室が中心となって環境デザイン学コースを新たに設け、1997年には大学院の再編に伴って地域生態工学研究室が本コースの担い手として新たに加った。これらの学部お

よび大学院の再編は、80年代から90年代における総合化の視点や環境指向を反映して実施されたものであり、学際的な環境科学の領域を多面的かつ総合的に教育研究しようとしたものである。その学科にあって環境デザイン学コースは、植物材料や植生の形態、生態を主に担ってきた緑地環境保全学と環境行動学から緑地の計画やデザインを担ってきた緑地環境計画工学が連携することによって、エコロジーとアメニティの両視点から環境の保全と創造に向けた専門領域を形成しようとしたものである。

学科の教育理念と教育方針

本学科は、環境科学領域の総合性と環境科学を構成する多面的な領域の専門性を習得することを目指しており、図-1に示すように1～2年次までは環境科学領域の多様な側面と専門領域の基礎的な側面を学習する。3年次にはカリキュラムコースを選択して専門的な学習を深め、4年次には研究室を選択してより専門性を高める。この中で、環境デザイン学コースは、アメニティとエコロジーの両視点から人間と自然との係わり合いの調節を基本において、計画学やデザイン学、景観生態学、緑化学の理論とリモートセンシングや地理情報システム、コンピュータグラフィクスなどの技術を応用して、人間生活や生物生息の場となる地域の豊かな環境の保全と創造に寄与することを目指している。

研究室のデザイン教育の特質と課題

本研究室はランドスケープ・アーキテクチャーの領域に所属するが、ランドスケープとは、図-2に示すように、土地（地形

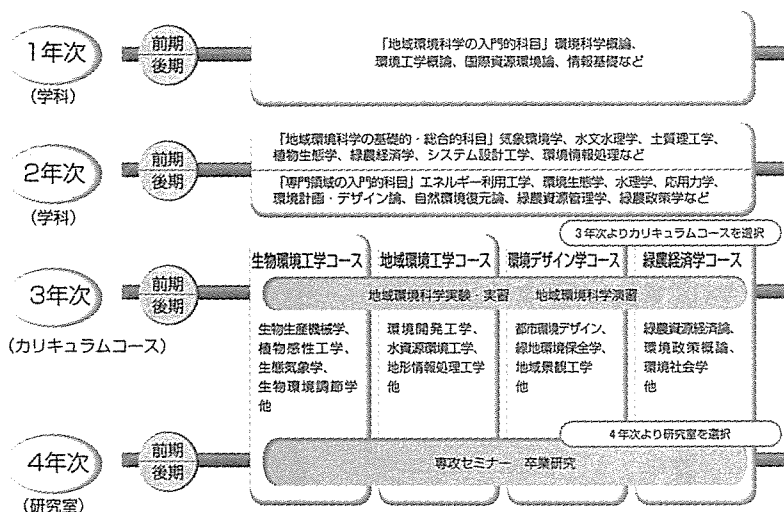


図1 学科のカリキュラム

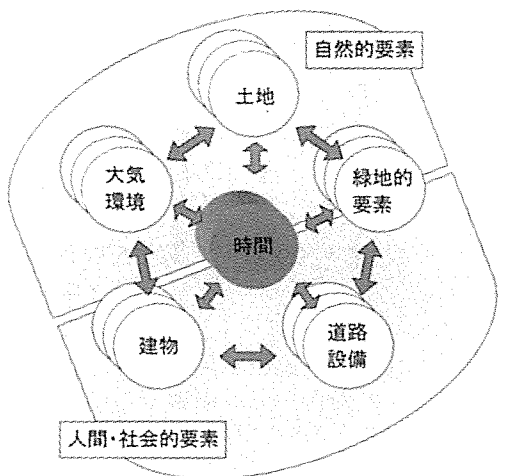


図2 トータルランドスケープの枠組み

や土壌、水系などの基盤的要素)、大気環境(気象・気候や光条件)、建築物、道路や設備、緑地的要素によって構成され、それぞれの要素が相互に作用しながら長い時間を経て形成された姿であると捉えている。言い換えると、ランドスケープを構成する土地と大気環境、緑地的要素の一部が自然に依拠する要素、建築物と道路・設備、緑地的要素の一部が人間や社会に依拠する要素であると言え、環境の基盤的要素である自然と人間活動との相互作用の蓄積によって形成されるものであり、自然的、社会的システムが投影された姿であると考えている。従って、本研究室で担っているデザインとは、自然的要素と人間・社会的要素との関係を調節する、あるいは、美的統合を図るというトータルランドスケープデザインの視点に立脚している。

上記の視点に立脚してデザイン教育では、地域の土地利用の適正化に係わるプランニングレベル(図-3参照)と空間のフィジカルな形態と質を決定するためのデザインレベル(図-4参照)の演習を実施しているが、デザインレベルは主に学部教育で実施し、プランニングレベルは大学院教育で実施している。両演習ともランドスケープを構成する自然的要素を対象とした自然科学的アプローチと人間・社会的要素を対象とした行動科学的アプローチの両アプローチを採り環境を構成する諸条件を理解させ、その結果をデザインに反映させることによって知識の総合化を目指すとともに、常にフィールドサーベイを実施し現実の素材に対する鋭い洞察力と豊かな創造力の開発に努めている。従って、デザインワークは、サイトアナリシス、コンセプトワークとサイトプランニング、ディテールデザイン、

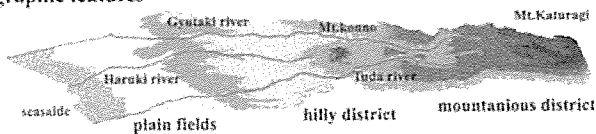
建設後の管理運営計画に至る一連のプロセスを重視している。また、対象とする空間スケールは、スモールアーバンスペースから初め、徐々にスケールを拡大し地域スケールに至る方式をとっている。

現在抱かえている問題点としては、本研究室が環境科学領域に位置づけられていることから、環境科学に係わる広範囲の知識が獲得できジェネラリスト的側面が強化されるもののデザインのプロフェッショナル的側面がやや弱体化していることや建築・土木系の学習が不足していることである。これを補完する上で3年次以降の学部教育と大学院教育との一環教育を実施しているが、学部の1~2年次からデザイン教育をスタートさせることや建築・土木系領域との連携も今後の課題である。また、昨今の環境ブームともいえる社会的風潮を背景に農学系に位置づいていることも加わり、学生の指向性が環境保全に偏重しており環境創造というデザイン領域の資質を持った学生が獲得しにくいという問題もあり、創造的能力の開発には「造ることの喜び」を感じさせることから始めなければならない。加えて、卒業設計や製作が制限されていることから、外部のデザインコンペへの参画によって補完せざるを得ない状況にある。

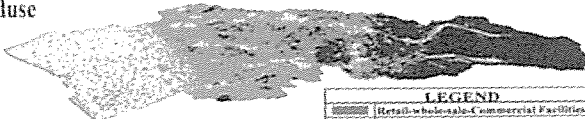
環境デザイン教育の今後

21世紀を迎えようとしている現在、大きな社会変革が起ころうとしているが、その変革の動向を整理すると、環境重視型社会を迎えようとしている中で循環の視点や再生産の視点が求められており・ジェネラティブデザインという視点、高度成長型社会から成熟型社会への転換の中でインプット型予算からアウトプット型予算への転換やイニシャルコスト重視からランニングコスト重視への転換、新たなストック形成が

Geographic features



Landuse



Landscape characteristics

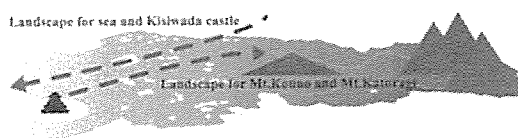


図3 プランニングレベルの演習
(2000年、花村・中井・安部作)

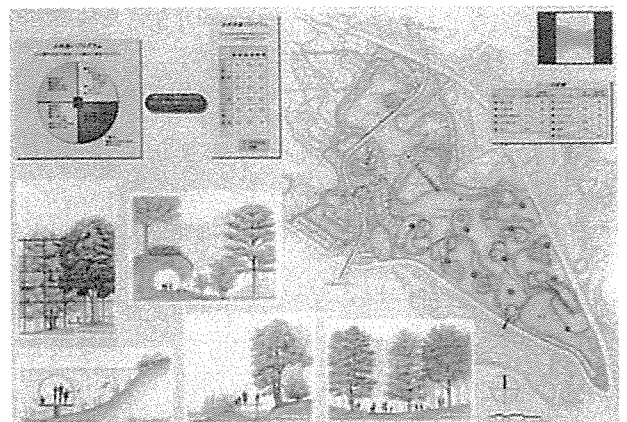


図4 デザインレベルの演習
(1997年、山崎・大野・芦辺・梶原作)

らストックの再生や活用など「ものの造り方」そのものが変換するという視点、地方の時代への転換の中で地域の自律性を支え地域の個性を担保するローカルスタンダードの確立の視点への対応が環境デザイン教育に求められると考えられる。従って、今後は、自然環境および社会環境を包含したトータルランドスケープの枠組みの中で地域の文脈や地歴に立脚したデザインが求められると考えられ、学際的学習とともに常に実社会と連携した実践的、体験的学習を充実させることが重要であろう。さらに、既成概念に捕らわれない創造的思考を常に刺激し、デザイン技術と社会システムの統合化を目指すことも重要である。

アンケートに対する回答

1 (正式名称)、2 (理念、教育方針)、3 (発足年、新設・改設の理由)、7 (特筆すべき教育内容)、8 (改良点、問題点)、10 については本文中で記述している。

4 教授、専任教師、非常勤講師など

緑地環境計画工学研究室

増田 教授 環境計画・デザイン論
都市環境デザイン

下村助教授 緑地環境計画工学
都市緑地論

土井非常勤講師 都市および地域計画
(大阪市立大学)

緑地環境保全学研究室

森本 教授 自然環境保全学
自然環境復元論

夏原 講師 緑地創成管理学

地域生態工学研究室

佐藤 教授 植物生態学
景観生態学

上甫木助教授 地域景観工学
緑地システム工学

5 カリキュラムと学生数

1 年生：地域環境科学科に所属
45 名

2 年次：地域環境科学科に所属
45 名

3 年次：環境デザイン学コースに所属
12 名

4 年次：緑地環境計画工学研究室に所属
4 名

大学院博士前期課程 1 年：

緑地環境計画工学研究室に所属
6 名

大学院博士前期課程 2 年：

緑地環境計画工学研究室に所属
6 名

大学院博士後期課程：

緑地環境計画工学研究室に所属
1 名

6 施設、設備、スペース

製図室：3 年生のデザインスタジオ

・設備：ドラフター 20 台

ゼミ室およびコンピュータールーム：

研究室の全構成員が使用

・設備：オートキャド

地理情報システム (Arc-info)

画像解析システム (Eardas)

コンピュータ・グラフィックス (Links)

その他、パーソナルコンピュータ 6 セット 等

学生演習室：4 年生演習室

(4 年生の机等)

大学院演習室

(大学院生の机等)

研究室図書室

スタッフルーム (教授、助教授、助手)

9 卒業生の進路

学部の卒業生：6 ~ 7 割が大学院進学

卒業生および博士課程前期課程 (修士) 修了者の傾向

・公務員：国家一種および府県や政令市の上級職の造園職が約 3 割

・ランドスケープ系のコンサルタンツ：計画・デザイン系に約 3 割

・土木、建築、都市計画系のコンサルタンツ：計画・デザイン系に約 3 割

11 先生の専門分野等

・専門分野：ランドスケープ・アーキテクチャー、緑地計画

・研究テーマ：都市の風景や景観計画・設計

都市の緑地計画

居住環境整備

・主たる著書

『住環境の計画・3』5 章の住環境のランドスケープデザイン 彰国社

『これからの安全都市づくり』第 2 章のオープンスペースと安全都市づくり 学芸出版社

『環境首都関西のデザイン』第 1 章 第 2 節の 水・緑調和の都市環境形成 学芸出版社

名古屋市立大学 芸術工学部

奥山 健二
OKUYAMA KENJI
名古屋市立大学

はじめに

名古屋市立大学は、医学部、薬学部、経済学部、人文社会学部、看護学部、芸術工学部の6学部と1センターから成る総合大学である。芸術工学部は平成8年に開設され、平成12年に第1回の卒業生を出すと同時に修士課程の学生を受け入れた。

芸術工学部は、人間社会に適合した環境を創造するために、人間社会についての広い視野と高い感性、科学技術に関する知識と技術をもとにして、多面的諸要求、機能をコーディネートし、調和のとれたデザインを実現する能力を備えた人材を育成するものである。ここでの科学と芸術を融合した高次のデザインに関する教育研究活動は地域を越えた世界の発展に重要な役割を果たすであろう。

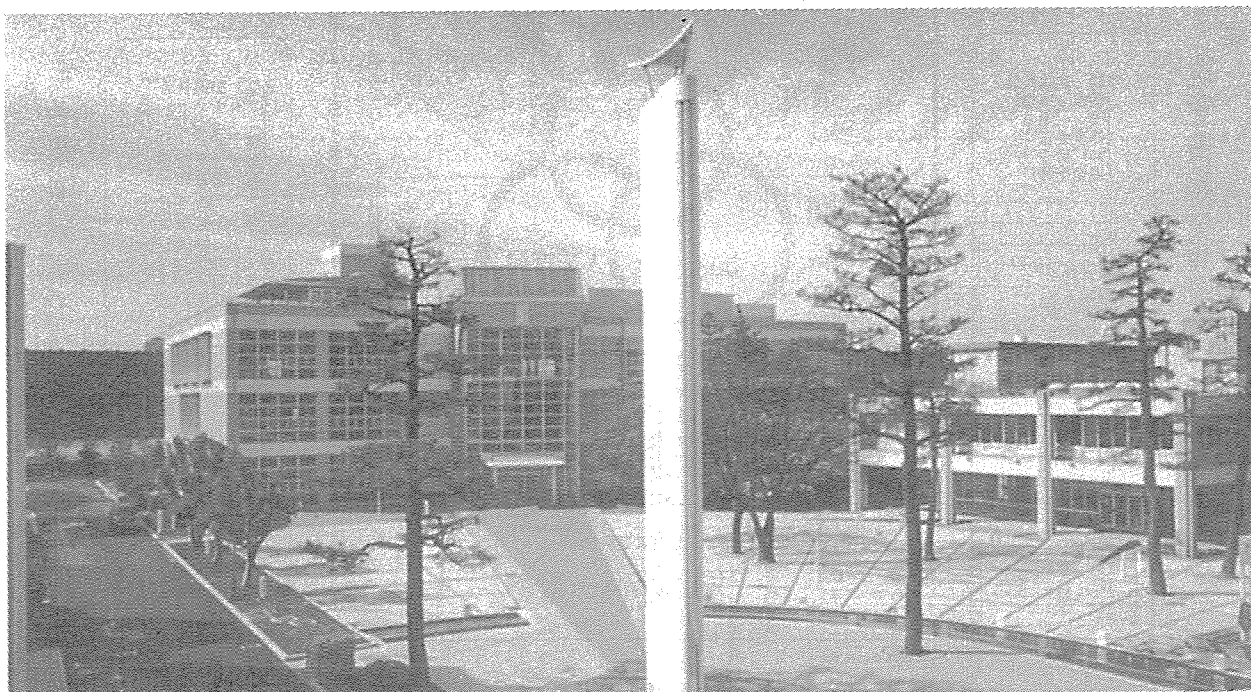
この理念に基づき、人間性を中心とし、高度情報化社会と高齢化社会に対応した快適環境の実現のため、高度な先端技術と芸術を融合させたコンピュータグラフィックデザイン等、新しい方法に関する研究を行う。さらにその実践に努め、変化しつつある社会において貢献できる感性豊かで高度な技術的知識を持つ総合デザイナーの育成を目的とする。

そこで本学部では具体的に、総合的企画とそのメディアにより展開をする「ことづくり」を中心とした視覚デザイン学科と、具体的なものを設計する「ものづくり」を中心とした生活環境デザイン学科の2学科を配置した。視覚情報デザイン学科は画像、

映像メディアと情報工学の先端諸技術を活用したデザインを行う。生活環境デザインでは、個人的居住空間や生活に密着した公共的空間において人間と生活環境を相互関連させてとらえ、人間にやさしい環境のデザインを行う。両学科はそれぞれの独自性を発揮しながらも、相互の有機的つながりのもとで必要な教育を行う。

1) 視覚情報デザイン学科

今日の社会では、情報伝達的手段として画像・映像などビジュアルなメディアが発達し活用されており、デザインの重要性が増してきている。また、高度情報化社会の中で快適な人間生活を支えるためには、先端技術を人間生活の道具として活用していくことが必要であり、特に近年非常に発達したコンピュータを中心とした情報処理の技術を取り入れていくことが大切である。このような時代の要請に応えるため、これらを系統的に統合し、活用できる人材が求められている。そこでこの学科では、視覚情報の有効な活用を前提とした総合的な教育・研究を実施し、情報工学の知識・技術を身につけ、さらに豊かな感性を磨くための芸術の基礎トレーニングを行う。そして、これらを総合したデザインの実践活動により、画像、映像、コンピュータグラフィックスなどのヴァーチャルの分野に加えて、現実の都市景観などの分野においても計画、設計などができる人材を育成する。



写真：大学パンフレットより

a)教育内容

芸術工学部共通科目として、芸術工学の基本概念を把握させるための「芸術工学概論」「デザイン概論」など、感性のトレーニングのための「造形基礎実習」、科学技術の基礎を学ぶための「数学基礎」「物理学基礎」「情報処理」「色彩論」「コンピュータ図学」などで構成され、30単位を履修する。

基礎科目群として、「ビジュアルデザイン概論」「視覚情報記号論」「視覚情報伝達論」「メディア論」等8単位。

基幹科目群として、「画像情報工学」「画像情報処理」「画像デザイン」「映像デザイン」等12単位。

展開科目群として、「デザイン系」「画像情報系」「景観系」科目群からなり、それぞれの科目群を中心に16単位以上を履修する。

関連科目群として、展開科目群を補強する科目で学生は必要に応じて各系の関連分野の科目を選択する。

実習として、基礎科目群、基幹科目群、展開科目群の履修により得た、視覚情報デザインの方法論を駆使してデザインを实践するばであり、「視覚情報デザイン実習Ⅰ、Ⅱ」各4単位必修、計8単位。「同Ⅲ、Ⅳ」各2単位選択、2単位。合計10単位履修

する。

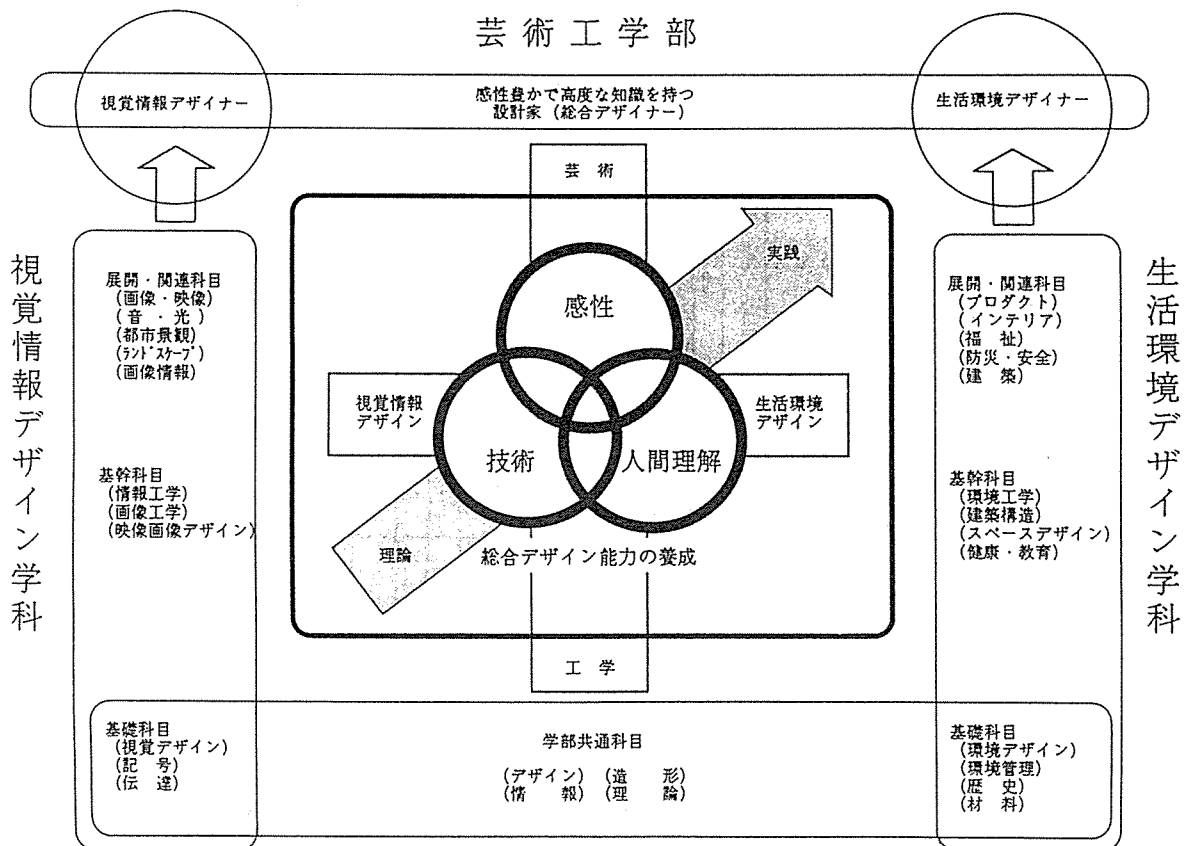
卒業制作、卒業研究は各4単位で、合計8単位が必修である。

卒業後の進路としては、(画像、映像デザイン)系は印刷、出版、広告代理店、デザイン事務所など、(画像情報デザイン)系は情報ソフト関係、画像関係、CAD事務所など、(景観デザイン)系は官公庁企画関係、都市計画コンサルタント、土木コンサルタントなどへの就職をする。また上記の関連する大学院へ進学する。

学生定員は30名である。

2)生活環境デザイン学科

高齢化社会が抱える様々な問題を解決することも含め、これからの生活環境は生活者を重視したものであることが求められている。例えば高齢化社会における公共的空間(病院、福祉関係施設を含む)を取り上げるなどして、人間と生活環境を相互関連させてとらえる研究が必要になる。その上で都市などのより広い立場や公共的な立場に視点をのけた、より快適な生活環境づくりについての総合的アプローチが実施されねばならない。この学科は、人にやさしく、



芸術工学部概念図

大学パンフレットより

機能的で美しい生活環境の計画、設計に関わる科学技術を教育・研究し、これに基づき建築、インテリア、プロダクトデザインなどのデザイン手法を応用しつつ、地域社会の公共的空間との関わりやその健全な公共的空間の形成等を含む生活環境の計画、設計などができる人材を育成する。

a)教育内容

芸術工学部共通科目は先に記したものと同様で30単位を履修する。

基礎科目群として、「環境デザイン概論」「建築史」「環境管理論」「デザイン材料」「生活環境科学」など10単位。

基幹科目群として、「建築構造学」「スペースデザイン」「環境工学」「健康施設デザイン」「教育施設デザイン」等11単位。

展開科目群として、道具レベルの環境デザインである「プロダクトデザイン系」と建築レベルの環境デザインである「建築系」科目群からなり、それぞれの科目群を中心に必修3単位を含め17単位以上を履修する。

関連科目群として、展開科目群を補強する科目で、「福祉環境論」「社会心理論」「構造設計法」「耐震工学」「防災安全計画」などから学生は必要に応じて各系の関連分野の科目を8単位以上選択する。

実習は基礎科目群、基幹科目群、展開科目群の履修により得た、生活環境デザインの方法論を駆使して、デザインを実践する

場である。「生活環境デザインⅠ、同Ⅱ」各4単位必修、計8単位。「同Ⅲ、Ⅳ」各2単位選択、2単位。合計10単位履修する。

卒業制作、卒業研究は各4単位で、合計8単位が必修である。

卒業後の進路としては、(プロダクトデザイン系)はインテリアデザイン事務所、家具等の生活関連機器産業、製造業デザイン部、医療福祉産業、官公庁などへ、(建築系)は官公庁建築関係部局、建築設計事務所、建設会社、住宅産業などへ就職する。また上記の関連する大学院へ進学する。

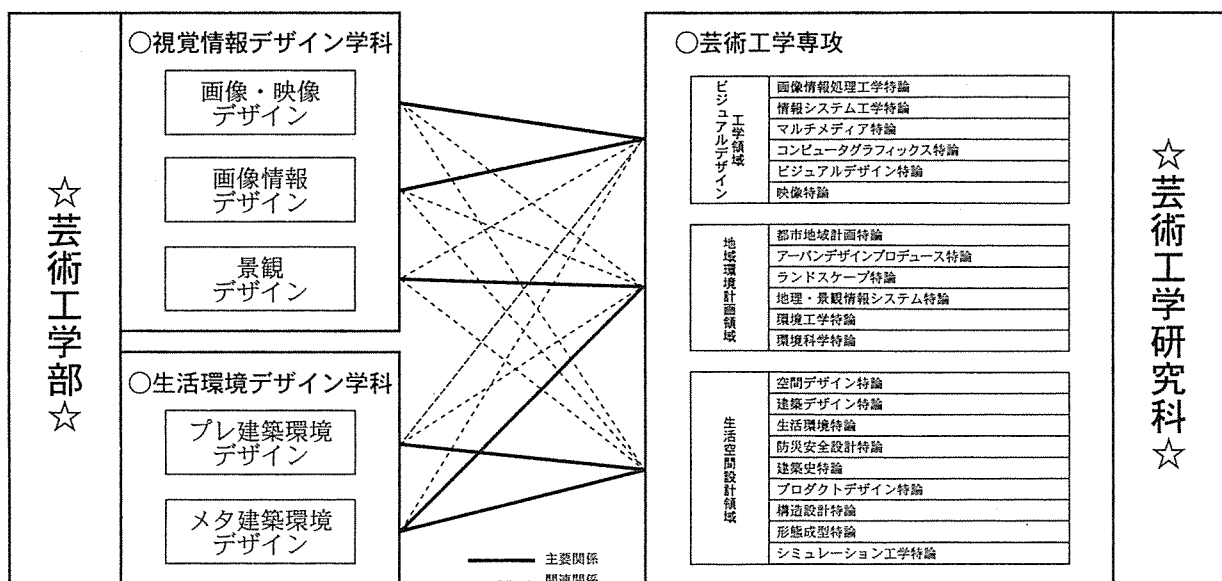
学生定員は30名である。

3) 大学院芸術工学研究科

芸術工学研究科は、学部教育で培われた感性と、幅広い科学技術に関する知識を前提に、多様化した計画、設計に関する知識を修得させるとともに、現実社会と密接に結びついた実務経験を通じて、情報化社会の発展と人間性豊かな社会の実現に貢献できる科学技術に関する一層高度な専門知識と感性を持つ実務設計家並びに総合技術者を養成することを目的とする。

本専攻では、ビジュアルデザイン工学、地域環境計画、生活空間設計という3つの研究領域を設定し、各領域毎に、科学技術の知識と専門的な実務経験を持つ設計家と技術者及び研究者を養成するための高度な専門教育と研究を実施する。

芸術工学研究科と既存学部との関係



a) ビジュアルデザイン工学専攻

情報システムの構築あるいは画像処理の理論と応用を学習した後に、情報システム或いは画像処理の技術に応用したメディアの処理と画像・映像やグラフィックデザインなどに関する様々な視覚情報の融合総合化への理論あるいは画像・映像表現への応用手法の修得を目指す領域である。

専門授業科目として次の科目を開講している。「画像情報処理工学特論」「情報システム工学特論」「ビジュアルデザイン特論」「マルチメディア特論」「コンピュータグラフィックス特論」「映像特論」

b) 地域環境計画専攻

都市あるいは地域環境を対象とする分析・計画理論と応用を中心として、計画の前提となる環境分析・評価あるいは数理的解析手法、計画実現のためのプロデュース理論、ランドスケープに関わる景観計画の理論と応用の修得を目指す領域である。

授業科目として、「都市地域計画特論」「アーバンデザインプロデュース特論」「ランドスケープ特論」「地理・景観情報システム特論」「環境工学特論」「環境科学特論」などが講述される。

c) 生活空間設計専攻

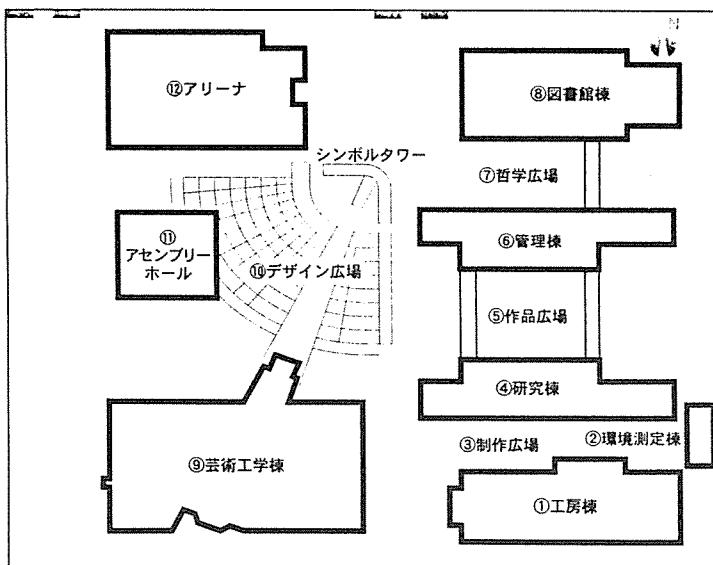
生活空間を構成する建築あるいはプロダクトを対象とする計画・設計理論と応用を中心として計画・設計の前提となる快適性や安全性、歴史的変遷、構造理論あるいは材料特性、数値解析などに関する理論と応用の修得を目指す領域である。

講義科目として、「空間デザイン特論」「建築デザイン特論」「プロダクトデザイン特論」「生活環境特論」「防災安全設計特論」「建築史特論」「構造設計特論」「シミュレーション工学特論」「形態成型特論」などがある。

共通科目として、「造形表現」「情報工学」「芸術工学特別講義」「学内実務プロジェクト」または「学外実務プロジェクト」があり、修士論文のための「専門科目演習」および「特別研究」が必修である。

修士課程を修了するためには所要科目を履修して30単位以上を修得し、かつ学位論文を提出し、その論文審査及び最終試験に合格しなければならない。

平成12年度は31名受験し、23名が合格している。社会人はそのうち3名である。



大学パンフレットより

①工房棟

1F=デザイン材料や構造実験のための工場(1)、主に立体造形の制作のための工房(1)
2F=景観シミュレーションのための実習室
3F=パソコン、グラフィックワークステーションを配置した工場(2)、主に平面造形の制作のための工房(2)

②環境測定棟

室内環境汚染物質測定のための実験室

⑨芸術工学棟

1F=音響と環境関連の実験・実習諸室およびプロダクト系実習室とマルチメディアに対応した情報系実習室
2F=視覚情報デザインおよび生活環境デザイン両学科の2年生以上の実習用デザインルーム
3F=最新の映像・情報機器を導入した映像スタジオ、VRシステムおよび建築都市デザインの研究室
アトリウム=中央部で両側の建物をつなぐ透明感のある空間。作品展示、パフォーマンス、およびコミュニケーションの場

札幌市立高等専門学校

後藤 元一
GOTO GENICHI
札幌市立高等専門学校

1 正式名称

札幌市立高等専門学校インダストリアル・デザイン学科環境デザインコース

2 講座の理念や教育方針

環境デザインコースでは、人間が生活するために必要な環境（建築、都市、地域等）と自然との融合、調和、均衡の方向を探究し、快適な生活環境を創出するための計画、設計にとりくむ。

具体的には、基礎となる自然（気候、地形、地質、水系、植生等）、人が集まって住む都市や地域の仕組みを知り、自然環境の保全やランドスケープ、都市環境や地域環境の整備等の計画、設計技法について研究し、さらに環境を形成する生物学的、熱学的な問題、歴史学や社会学、地理学、文化人類学などの関連する分野についても広く学ぶ。

3 講座の発足年

本学の歴史は、1980年に当時の市長の強い要望による国立芸術大学の誘致に始まる。その後紆余曲折を経て、17年ぶりの高等専門学校、デザインを教える高等教育機関として、1991年4月に開校した。1、2年次で一般科目と造形基礎を重点的に学び、3年次では専門コースをひとつとり体験し、4、5年次で専門5コースに別れて学ぶ。1996年4月には学位授与機構認定の専攻科が設置された。

4 教授、専任教師などの内容

現在1コースは、教授2名、助教授2名、非常勤講師3名、特別講師4名で運営している。担当科目は4、5年の座学を専任教

員と特別講師が行い、演習・実習を専任教員と非常勤講師で行う。実習・演習は4年次で8課題、5年次で前期6課題、後期は卒業制作となっている。

5 カリキュラムと学生数

カリキュラムは別表のようになっている。一般科目と専門科目に分かれており、学年が進むにつれて専門の比重がたかくなる。専攻科ではコースの枠は弱まり、学生が個人的に受講科目を設定できる幅が広がっている。また学位授与機構による学士の資格を得るためには、他大学での授業（本大学では放送大学を利用）16単位が必要とされる。

学生数は本科一学年80名、専攻科一学年20名で、合計440名前後である。

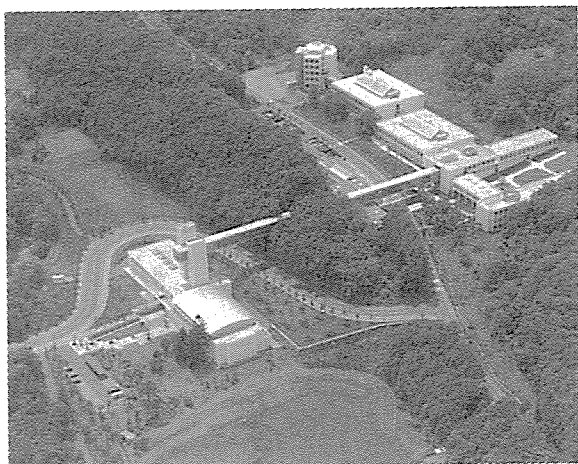
6 施設、設備、スペース

校地は真駒内川左岸の河岸段丘にあり、周辺はミズナラなどの雑木に囲まれ、真駒内川右岸を走る国道453号線からは、ほとんど校舎は見ることができない。正面の高さ36mのエントランスタを登り135mのスカイウエイを進むと右手に一般教養棟、左手に専門科目棟につながり、最奥に専攻科の塔がある。専門棟にはそれぞれ工房とアトリエがあり、4、5年次はアトリエの各自の机が本拠地となる。

7 特筆すべき環境デザイン教育内容

複雑化して行く社会の中で環境をトータルにとらえ調整して行く環境デザイナーを育成して行くに当たって限られた時間の中での有効策として、できるだけ実習、演習の時間を取り入れる。実習課題は具体的な場所を設定し、現地調査の結果からその場所が何を求めているのかをみつけだしその

Bird's-eye View



写真：学校パンフレットより



高等専門学校制度

実際の環境の保全活動やまちづくり、地域の計画に参加し、ハードやソフトの面からのデザインのあり方を現地の人たちや行政の人たちから学ぶと共に、一緒に考えることにより自分たちのやっていることが社会とどうつながっているか自覚する。

＜本科カリキュラム構成＞

＜専攻科カリキュラム構成＞

図は、本校の教育分野を8つのパートに分類し、それぞれがお互いに関係を持ちながら社会の中で関わるであろう分野に向かって行く姿を表します。

学生一人一人が自らの個性を伸ばし、自由にやりたいことを追求して行くことで、天職を見つけ、それぞれの分野で社会に貢献できるでしょう。

高専という制度上時間等が限られ、上記の課題に未消化の部分もある。また講義系の授業が圧迫され基礎的な知識を学ぶ時間が限られてくる。

学生の卒業後の進路は当初はコンサル系、情報系等幅広く、本学の専攻科や他大学の編入、海外留学等の進学を上回っていたが、昨今の社会状況や、編入を認める大学の増加に伴い進学希望者が増えた。進学先は農林学系や工学系、デザイン系などにわたる。

世の中の環境に対する認識が進んでくると、従来のようにそれぞれの専門分野の上に環境デザインの看板をのせるだけでは対応できなくなってきた。

複雑化する社会の中で、「環境」をしっかり見据えどのように取り組むか、教育の面でも従来のようなカリキュラムや年限だけでは対応出来ないのかも知れない。それだけにやりがいのある仕事だと思われる。

環境設計。

地域計画、伝統的環境の整備、ランドスケープデザイン、景観整備計画、まちづくり、史跡整備計画、他。

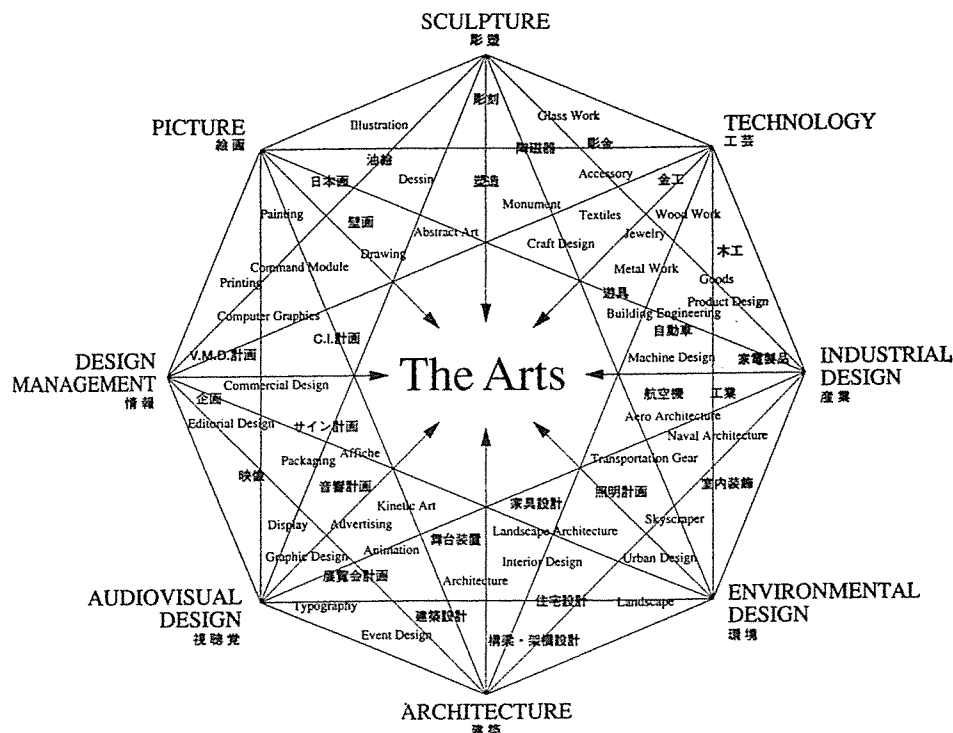


Chart of the Arts

女子美術大学

中嶋 猛夫
NAKAJIMA TAKEO
女子美術大学

アンケート

1 正式名称

女子美術大学 芸術学部 デザイン科
環境計画専攻

2 講座の理念や教育方針

(1) デザインの今日的意義

20世紀は科学技術により豊かな社会を造り出したが、世紀末に至り急速な技術革新と自然環境の悪化、価値観の多様化と心の荒廃、社会システムのボーダーレス化など地球規模で様々な問題が提起されていて、21世紀はそれらのバランスと調和が求められている。デザインは人間の豊かな生活環境を創造する手段であり、人と人のコミュニケーション、人とモノの関わり、人と環境のあり方を考え、創造するその行為は、まさに今日の社会で必要とされるものであります。

(2) 教育方針

21世紀の様々な世界で活躍するデザイナーを育成することを目指します。今日の急速にボーダーレス化する社会において必要とされるデザイナーは、旧来の固定化したデザイン分野に学生をおしこめることから生まれません。広い視野と深い洞察力で時代の流れや条件を考察する知識や、学生の豊かな感性と柔軟な思考を伸ばす多様なデザイン分野の創造方法や表現手段を学び、それぞれの個性を尊重した専門性を習得させ「自分の『手』と『目』で考える」デザイナーを育成することを目指す。

3 講座の発足年

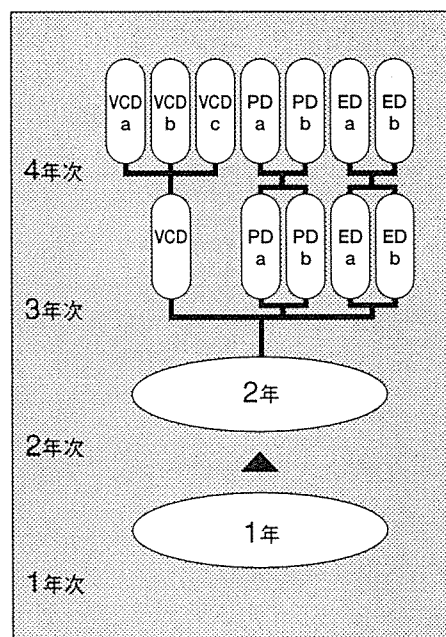
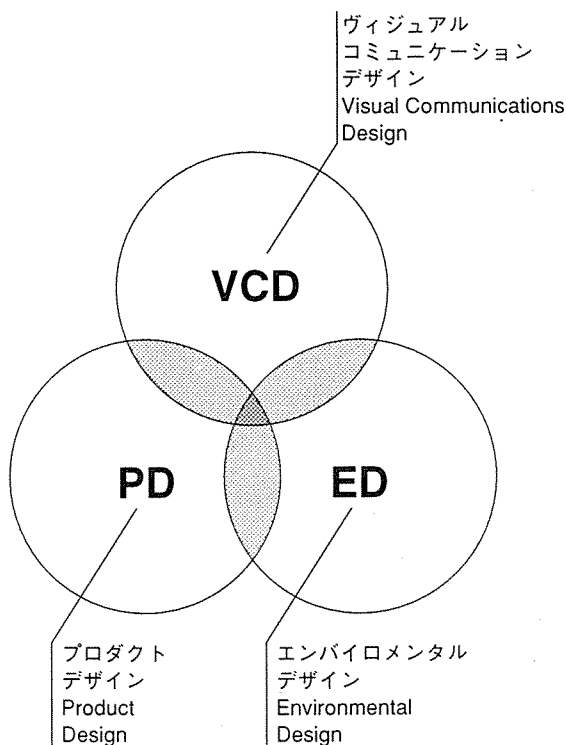
平成2年(1990年)4月新設、女子美術創立90周年を期して相模原市に新キャンパスを設置する際、社会的に意義ある新しい分野ということで環境デザイン部門が新設された。正式な組織としてはデザイン科環境計画専攻となり、既存の産業デザインが造形計画専攻と改称されデザイン科は2専攻となった。

4 教授、専任教師などの内容

専任教員と専門分野は、教授は環境用具設計(プロダクト)／生活環境設計(インテリア)／公共環境設計(ランドスケープ)／情報機器設計(ID)／視覚情報設計(グラフィック)の5分野5教授、助教授は環境用具設計(家具)／画像設計(CG)の2分野2助教授、そのほか実技実習、演習科目担当で20名ほどの非常勤講師と数名の自校他学科専任、授業補佐として5名の助手でカリキュラム全体を運営している。

5 カリキュラムと学生数

学生数は、学部環境計画専攻で一年80～88名、大学院は数名。



大学パンフレットより

1 年次

必修

幅広くデザイン全般の基礎的な技法、材料や工法について学習し、想像力と創造力を養うことを最大の目標とする。

●造形実習（絵画・彫塑）

油彩による静物画や人物画、塑像によるトルソの制作。

●デザイン基礎実習（平面Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

色彩や形の形成・構成についての基礎実習科目。コンピュータによる表現手段も学ぶ。

●デザイン基礎実習（立体Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）

空間や立体の基本となる造形実習。材料の特性、加工法、工具の扱い方などを学ぶ。

●デザイン概論B

デザインの諸問題について、空間・情報・生産デザインの視点から概説する。

2 年次

必修

空間・情報・生産の各分野の基礎的な実技科目として、環境基礎デザイン、情報基礎デザイン、基礎設計の三つのテーマを、全員が履修する。隣り合う分野について多角的に研究することにより、デザインの全体像を把握・修得することを目的としている。

●環境基礎デザイン（A・B）

環境デザインの基礎として、発想から設計まで課題制作を通して実習する。

●情報基礎デザイン（A・B）

視覚情報デザインの基礎として、伝達の方法、表現について、コンピュータによる手段も含めて実習する。

●基礎設計（A・B）

生産デザインの必修の要件となる、立体表現（モデリング）と平面表現（製図）について実習する。

3 年次

必修

2 年次の末に、それぞれ希望に従って、空間系・情報系・生産系の三系のうち、ひとつを選択して研究する。3 年次および 4 年次前期までは、より専門的で高度な研究期間として位置づけている。4 年次の後期は、卒業制作とし、各自自主的に研究テーマを設定して、4 年間の研究・学習の成果を自らに問い、発表する。

3・4 年次で選択履修

●公共環境設計Ⅰ・Ⅱ

公園、広場などを具体的に取上げて、設計の実習をする。対象の分析、コンセプトづくり、造形性など諸デザイン要素を研究する。

●生活環境設計Ⅰ・Ⅱ

生活空間の環境をデザインするために必要な基礎を学習したうえで、実際の設計実習を行う。

●視覚情報設計Ⅰ・Ⅱ

視覚情報を伝達するための造形処理についてのデザイン実習。

●画像設計

情報を視覚的に伝えるための画像について、研究課題により実習。例えばイメージ広告を媒体（新聞、雑誌、ポスター）別に実習する。

●サイン計画Ⅰ・Ⅱ

環境設計上、特定の地域などの、使用のためのサイン（指示標識、案内標識など）のデザインや、シンボル・デザインの实習を行う。

●情報機器設計Ⅰ・Ⅱ

生活環境を形成する機器を取り上げ、人間生活との関わりについて考察し、デザインの構想、モデル制作、作図などの実習を行う。

●環境用具設計Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

人間と道具、住空間と道具などの関係やあり方を主なテーマとして、照明器具などを課題として生産デザインについて実習する。

●卒業制作

4 年間の集大成として作品制作を行う。

4 年次

必修

選 択

共通専門講義科目（各学科共通1～4年次）

- | | |
|----------|-----------|
| ●西洋美術史Ⅰ | ●工芸理論 |
| ●西洋美術史Ⅱ | ●生体機能論 |
| ●日本美術史Ⅰ | ●図学 |
| ●日本美術史Ⅱ | ●設計製図 |
| ●造形心理学 | ●保存科学 |
| ●現代美術論 | ●材料学（繊維） |
| ●絵画表現論 | ●材料学（陶磁） |
| ●美術解剖学Ⅰ | ●色彩学 |
| ●美術解剖学Ⅱ | ●色彩計画論 |
| ●近代絵画理論 | ●色彩管理概論 |
| ●版画史 | ●マーケティング論 |
| ●美学 | ●情報論 |
| ●芸術学 | ●映像論 |
| ●東洋美術史 | ●建築概論 |
| ●西洋美術史特講 | ●演劇論 |
| ●日本美術史特講 | ●舞台美術論 |
| ●古美術研究 | ●現代造形論 |
| ●書道 | ●空間演出論 |
| ●書道史 | ●テキスト表現論 |
| ●デザイン史 | ●環境論 |
| ●工芸史 | ●考古学特講 |
| ●文様史 | ●知的所有権概論 |
| ●デザイン概論A | ●外国書講読 |
| ●デザイン概論B | |

2～4 年次で選択履修

- | | |
|------------|----------|
| 色彩計画演習 | コンピュータ演習 |
| 造形素材演習 | 人間工学演習 |
| デザインサーベイ演習 | 造形心理学演習 |
| 展示計画演習 | 映像表現演習 |

6 施設、設備、スペース

環境計画専攻は矩形の中庭がある独立したRC造3階建てで、実技大教室（最大50人までの学生一人ずつに専用のB1サイズ製図板デスクと補助机と作業椅子が確保されたスペース）が4室（1年、2年は2クラスに別れる）と実技小教室（3、4年は3系統にそれぞれ別れ、上記のセットが36人分まで入る）が9室とそれぞれにロッカー室。工房はパワーmacが20台あるコンピューター室が2室ありそれぞれCG用、CAD用である、またmacのG3やB全サイズのプリンターやカラーコピー機などが整った教員および大学院用の小コンピューター室も1室ある。そして木工用、金属用、印刷用、シルクスクリーン用、塗装用の5工房と30台のドラフターのある製図室、図書室、会議室、ゼミ室、非常勤講師室、助手室兼授業準備室、作品置き場兼倉庫4室、屋外作業用ピロティー、専任教員用7研究室などがある。

7 特筆すべき環境デザイン教育内容

環境デザインの関わる領域は広いので、1、2年次に基礎造形と情報系、生産系、空間系の基礎的課題を経験させ、広いものの見方と創作方法と表現、伝達手段を学び且つ学生自身の適正と興味を明確にして、3、4年で専門領域を深めて卒業制作において集大成させるカリキュラム。

8 改良点・問題点

1、2年次の1クラスの学生数が40～45名いて、多様な思考と人格、内容レベルの差のある課題のアイデアスケッチやエスキースを一人ずつチェックしサゼッションするのは毎年楽しいが時間が掛かり且つ大変疲れる。

女子美の現行デザイン科は2専攻に別れているが重複する分野があり、本年は創立100周年でもあり、来年の21世紀の始

まりを期して新デザイン学科として統合して、環境デザイン部門はエンバイロメント・デザインコースと改称することとなりました。

9 卒業生の進路の分野、傾向

卒業生の進路に関してはここ2～3年は厳しい状況であるが、大体のところグラフィック、商品開発関係が30%、プロダクト、ID関係が20%、住環境関係が15%、コンピューター関係が10%、展示、イベント関係は5%、教職、進学が5%、その他となっているようだ。

10 21世紀の環境デザイン教育はどうあるべきかについて

『21世紀は環境の時代』20世紀の大量消費、大規模汚染、自然破壊、大規模一局集中のシステムから抜け出し、サステナブルでエコロジカル、小規模自立分散ネットワークシステムへと変わり、造形もモダニズムのシンプルさのみでなくなり、それら様々な価値観を反映した環境デザインの有り様がもとめられるであろう。

11、専門分野：環境デザイン（景観設計）

研究テーマ：？日本の宗教空間（景観論）？現代都市の外部環境（庭と広場と公園と）？エコロジカル、エンバイロメント、デザイン

著作：●学位論文「日本の山岳寺院、神社の境内構成研究」

●「パブリックデザイン辞典」共著
その他

作品：◎箱根プリンスホテル、レイクサイドロッジ景観設計
◎両国、回向院境内整備および屋上庭園設計
◎秋田県、小坂町康楽館、和風公園景観設計
◎自立型多機能防災タワーとネットワークシステム
その他



大学パンフレットより

「土木工学科における景観・デザイン教育 — 東京大学の場合 —」

篠原 修

SHINOHARA OSAMU

東京大学

1. 講義、設計演習と研究室の発足

●東京大学土木工学科における景観とデザインに関する教育は、平成元年度に開講された「景観設計Ⅰ」及び「景観設計Ⅱ」から始まった。戦前の一時期「橋梁美学」に関する講義が非常勤講師により開講されていたが、橋梁のみに留まらない土木の全般を対象とする講義及び設計演習が開講されたのは学科設置（工部大学校、明治10年）以来初めてのことでないかと思う。

「景観設計Ⅰ」は3年前期の講義、「景観設計Ⅱ」は3年後期の設計演習で（名目は講義。その理由は後述）、その位置づけは今日に至るまで変わらない。担当教官の常勤、非常勤の別は、平成元年度のみ全て非常勤、平成2年度からは「景観設計Ⅰ」が常勤、「景観設計Ⅱ」が常勤に非常勤が加わるという形である。なお、「景観設計Ⅱ」、つまり設計演習の非常勤は中野恒明（街路、広場）、岡田一天（水辺）、内藤廣（建築）の各氏に順次お願いして今日に至っている。

●研究室は「景観研究室」が平成5年度に発足し、以来教授、助教授、助手各一名の体制で運営されてきた。大学院（社会基盤工学専攻）では「景観論」が開講され、その時々の方考え方により、特定課題についての調査研究、第一線で活躍するデザイナー、プランナーを招いての特別講義と討論、設計演習などを試行してきたが、ここ数年は設計演習の実施に落ち着いている。

2. 教育内容とその特色、問題点

●教育の目的は、橋、道路、河川、港湾などの土木構造物、土木施設をデザインし、それらが形成する景観を考えることの出来る土木技術者（エンジニア・アーキテクト、土木造形家）を養成することに尽きる。

「景観設計Ⅰ」では景観に関する基礎知識を習得させ¹⁾、土木の設計の理論（一般原則）とその実際を講義している。発足当初にはこれらに加え、設計・計画史をもう一本の柱としていたが、景観研究室が「都市計画」の講義を担当するに至った時期から設計・計画史は「都市計画」へ移項させた。なお、後述の問題点と関連するが、将来的には（可能であれば）景観に関する基礎知識は「景観設計Ⅰ」から分離独立した講義とし（「景観解析」）、「景観設計Ⅰ」は土木のデザインのみの講義とすることを考えている。

「景観設計Ⅱ」では、橋梁、河川構造物、街路等の構造物、施設とそれらを含む景観の設計演習である。当初は講義室やゼミ室で実施していたが、建物（工学部一号館）

の改築に伴い専用の設計演習室を確保してもらい、今日に至っている（一言付け加えると、CADの発達に伴いほとんどの大学の土木工学科では製図室が廃止されてしまった。今日では製図室を持たない土木工学科の方がむしろ一般的な姿であろう。東京大学もその例に漏れなかったわけであるが、学科の支持で復活したのである）。

●学生の履修状況は講義である「景観設計Ⅰ」がほぼ100%、設計演習である「景観設計Ⅱ」は年度により差はあるものの、30%から50%という所である（一学年約60名、なお、東大の土木工学科では卒論と夏期測量実習を除いて必修科目は無い。つまり、強制的に取らせているわけではない。念の為）。

●教育の特色は、以上の記述で容易に理解されることと思うが、景観の形成を大前提にした構造物、施設のデザイン教育という点である（IDや建築のデザイン教育においてよく見られる、製品や建築の形のみを対象とする教育には問題があると、ずっと考えてきたこともある）。

●最大の問題は、設計演習のコマ不足である。3年後期の半年間では、いかにもトレーニング不足である（これには東大土木工学科固有の理由がある。建築学科やデザイン系の学科とは違って、土木の卒業生は国家公務員、鉄道、電力等の公益企業、施工を主体とするゼネコンに就職する者が多く、コンサルタントに就職して設計を希望するものが少なかった。それに対応して、又対象とする構造物、施設の多様さ（例えば建築なら対象は用途の違い、規模の大小こそあれ、建築のみである）に対応して講義の種類は多岐に渡り、更には土質、コンクリート、水理等実験が多いため、設計演習のコマが割り込むスキが、カリキュラム上取れないのである）。

●デザインに意欲のある（デザインで飯を食っていこうとする）学生は、大学院に進学後、院の「景観論」の設計演習をとり（10名から20名程度）、更にお隣の建築学科の好意で建築の3年の設計製図を半年あるいは1年間とっている（3～5名程度、好意と書いたのは設計演習の面倒を見るのは手間がかかるので受講者数が増えるのは普通嫌がられるからである。伝え聞いた所によると他学科からの設計製図の受講を認めない大学の建築学科もあるのだという。東大でよかった）。

●現在の所、可能であれば「景観設計Ⅲ」を4年の前期に新たに開講し、よりトレーニングの度を高めたいと考えている。しかし

前述した様にカリキュラム上、コマを割り込むスペースが有るのかどうかの問題に加え、建築のように（その就職後の仕事は本当は違うにせよ）、全員がデザインのトレーニングを受けることが建築が建築たる所以であるという学科の総意がない土木の状況では、どの程度デザイン教育に力を注ぐのが良いかは、難しい問題である。これは養成しようとするエンジニアのタイプ（例えばエリート官僚、自治体職員、ゼネコン施工者）を基に、各大学の土木工学科毎に考えるべき問題であろう。又別の見方をすれば、土木全体の中で、将来デザインを担当するエンジニアがどの程度の割合で、求められるかという事柄によるのであろう（少なくとも従来はその割合は低かった。但し、欧米先進国の土木ではその割合は日本に比べ遥に高い。あちらでは土木のデザインが競争社会だからである）。

3.就職先とその課題

●デザインを志す卒業生の就職先を大別すると3つになる。それがここ10年程の筆者の研究室と橋梁研の卒業生の実績である。橋梁や構造物のデザインを志す者は、橋梁を得意とするコンサルタント又はゼネコンの設計部に入る。ゼネコン設計部を選ぶのは建築の卒業生が安定性を求めてアトリエではなくゼネコンに行くのとは違い、橋梁の場合、架設、施工の方法が、場合によっては設計以上に重要となるからである。まず架設法から勉強しようとする者が居るのである。

●橋梁、構造物以外の水関連の施設、河川そのもの、あるいは街路や広場等の都市に興味を持つ者は都市系の設計事務所に就職する。就職先はこのような様々だが、課題の方はむしろ共通している。それは就職先のコンサルタント、ゼネコンの設計部に、若手のエンジニアを鍛えてくれる才能と実績を備えた、著名なあるいは中堅の、指導的なエンジニアが絶対的に不足しているという点である。ヨーロッパであればF. レオンハルト教授（故人となってしまったが）の事務所に、あるいはJ.シュライヒ教授の事務所に、又はP.ライス（これも故人）の居るオブアラップ事務所に、と明快である。日本においても戦前であれば帝都復興橋梁を指揮した田中豊先生あるいは万代橋の福田武雄先生の元へと考えることが出来た。しかし、戦後、大学の教授は（欧米と違って）設計の実務に携わることも少なく²⁾、

又、役所は設計の仕事はコンサルタントに発注し、そのエンジニアは著作権（財産

権）も与えられず役所の下請け的に使われるという状況が続いたため、大学にも、役所にも、コンサルタントのいずれにも、橋梁をデザインするエンジニアが不在となってしまうのである。

●当面は、有意な若手を次々と育て、少数ではあるが才能と実績のあるエンジニアの元へその若手を集中投入し、現状を切り拓く途を作る。あるいはヨーロッパのエンジニアの元で修業させる等の方法を考えねばならない。

4.景観・デザイン教育の今後

●我が国の都市あるいは国土が景観、環境の面で良くなる為には、それを担当するエンジニア、アーキテクト、デザイナーがトータリティを獲得できるか否かにかかっていると思う。何故なら景観や環境という概念はトータリティに他ならないからである。建築を知らない造園家に風景はデザインできないし、水のことを知らない建築家に都市はデザインできない。出発点は土木、建築、造園、あるいはIDと違っていても良いが、互いの分野の基本が何処にあり、何がデザイン上のキーポイントか位は知っておく必要がある。それには日本の縦割りのやり方を超えて、チームを組んで一緒に仕事をするのが最短の、そして最善の道であると思う。教育もその方向に向けて大学院において異職能交流を実施するのがよいと思う。筆者は、実践においても教育においても、今、それを試みつつあることを付言しておく。

参考文献

1)「景観の教科書を」という要望は前々からあり、しかし教科書を書く自信は到底持てないので、景観に関する基礎知識を編んだ本を作った。

篠原修編、景観デザイン研究会著：景観用語事典、彰国社、1998.11

2) 日本の大学の土木の教官で、デザインを実践している人物は皆無であると思う。勿論各々の（例えば、風の問題や疲労といった）専門の立場でアドヴァイス、指導することは普通に行われているが、筆者のここ15年程の設計指導、アドヴァイス、監修した結果をまとめた冊子を次に挙げる。大学の教官もデザインによりコミットすべきであると考えて製作し、配布している。

篠原修+景観研究室：或るエンジニア・アーキテクトの仕事 東京大学社会基盤工学専攻、1999.2

神奈川大学

高橋 志保彦
TAKAHASHI SHIOHIKO
神奈川大学

神奈川大学は、横浜の都心からさほど遠くない神奈川県にありま

す。もともと横浜市は都市デザイン行政の先進都市。市内に多様な街づくり整備の実例があり、全国から集まる学生にとって大変参考になり、都市デザインを学ぶには最適の立地といえます。私自身、いくつかのプロジェクトに関わってきました。

平成5年（1993年）より、建築学科が「デザインコース」と「システムコース」の2コース制に移行したのを期に、デザインコースの選択必須科目の中に3年次の後期にとれるよう「都市デザイン論」という新たな講義科目を設けました。

建築をつくる時、その敷地内だけを捉えて設計するという「愚」から脱却するように（これは学生だけでなく有名建築家もよくやっている）地域の空間構造や文脈を読みとり、民意、場所、時間、空間、と都市の様相を捉え、新たにつくられる建築が、それまでの風景をよりよくするようにしなければなりません。添付のシラバスにあるような内容で都市デザインの重要性を講じます。視覚情報が全情報の80%ということ considering スライドを多用しながら内外の情報、最新のニュース、都市デザインをする場合のプログラミングや手法を話します。スライドは長年自分で撮影したものから選び出します。最後の10分間で学生にコメントを書かせ提出させます。これは、「授業を真剣に聞くこと」「自分の意見を述べること」「文章力を磨くこと」「出席簿の代りになること」と一石数鳥を狙っています。最初の頃は「厳しい!」という感想を漏らす学生がいますが、最終講義のとき、採点に関係ないから本音で述べる感想文を毎年書かせます。「勉強になった」「文章を書くことが苦でなくなった」「わかりやすくなった」と殆ど全学生に好評です。

後期の毎週木曜日の2限が「都市デザイン論」で、午後の3、4、5限連続で「建築デザインⅢ」といういわゆる設計製図の時間があります。この授業ではここ数年、横浜の水際線あたりに計画地を設定し（ちなみに昨年度は象の鼻地区）「YOKOHAMA SCHOOL OF ARTS」という課題を出して設計させます。幸いなことに計画地の選定には事欠きません。計画地の特性一場所性を重んじ、先ず周辺の調査を4～5名のグループで行い、プロジェクトのプログラムを立て発表します。教授、非常勤講師、助手が順を追ってコンセプトな講義や各自の作品を紹介しながら設計手法をも話し

ます。毎年1回、横浜市都市デザイン室の方にも「横浜市のアーバンデザイン行政」についてもレクチャーしてもらいます。これまでに西脇氏、北澤氏、国吉氏に数回ずつ依頼しています。設計作業では教師陣が製図室を廻り毎回マンツーマンで指導します。

午前の講義「都市デザイン論」との連動を考えていますので建築の設計に都市デザインのアプローチをさせます。

アンケートへの回答

1 正式名称

建築学科の中の主要科目である「都市デザイン論」

2 講座の理念・教育方針

建築を設計する者はすべからず都市について学ばなければならない。

建築教育の中で都市と建築の関係の深さを認識させ、都市デザインの重要性を学んでもらうため「都市デザイン論」を開講し、私が担当しています。

建築の設計をするとき、少なくとも向う三軒両隣を意識することを各自の頭の中に浸透させ習慣をつけさせています。

また建築家の一人よがりを戒め、コラボレーションの大切さを説いています。

3 講座の発足年

平成5年（1993年）

4 教授・専任教師などの内訳

建築学科の科目としてあるだけで、私、高橋志保彦が担当しています。

5 カリキュラムと学生数

「デザインコース」と「システムコース」に分かれており、入試で受験生の希望を聞き、2年次に正式に分かれます。

デザインコース	計画、設計、建築史
システムコース	構造、材料、施工
	環境工学、設備

各学年 定員120名。

デザインコース約70名、システムコース約50名が希望。

6 施設、設備、スペース

デザインコースでは5つの研究室があり、研究室に隣接して製図室があります。

低学年のためには平行定規付製図机を

180基用意しています。

私の研究室は小部屋が2つあり、1つは図書室や打合室として学生の出入り自由にしており、そこで学生達と話し合います。

7 特筆すべき環境デザイン教育内容

教授陣営 理論と実践を教えること

教授 高橋志保彦 建築計画、設計、都市デザイン

教授 西 和夫 建築史

教授 室伏 次郎 建築計画、設計

助教授 高木 幹朗 建築計画

助教授 山家 京子 建築計画

都市計画

8 改良点、問題点

今のところなし

9 卒業生の進路・就職先の分野

設計事務所、コンサルタント事務所、施工会社、住宅メーカー等

10 21世紀の環境デザイン教育はどうあるべきかについて

自由と自己責任

他人の考え方も尊重すること

協働（コラボレーション）の必要性

地球環境とグローバル

都市生活の可能性と限界

11 先生の専門分野、研究テーマ、著作 都市デザイン

「都市の外部空間」

「都市景観」

「パリアフリーの都市空間」

主な著書

『都市環境のデザイン』プロセスアーキテクチュア

『ショッピング・モールの設計計画』彰国社

『ショッピング・プロムナード』地域科学研究会

『都市構造の論理』（訳）ディビッド・ルイス篇、彰国社

『歩行者空間』建築資料研究会一責任編集
その他共同執筆多数

546 工学部 建築学科（建築主要科目）

授業科目	都市デザイン論
	Urban Design
担当者	教授 高橋 志保彦
単 位	2

授業内容

都市には様々な人々が住み、多様な価値観をもって生活している。より質の高い魅力ある都市環境の整備を目指し、生活者の視点に立って生活空間をつくり出すのが都市デザインである。企画・誘導・調整・制約・デザインという行為が必要となり、多くの人々との関係が重要で、いわば「関係のデザイン」でもある。本授業では諸々の切り口から都市デザインを講じる。

授業計画

- 都市と建築（1回）
 - 都市と建築の関係と歴史的変遷
- 都市と外部空間（3回）
 - 地と図
 - 街路、広場、公園、水と緑、色彩と光、プロポーション等の空間特性と形成手法、文化としての外部空間
 - 民族的特性と外部空間の形成手法
 - 現代都市の問題点
- 都市景観と都市風貌（2回）
 - 都市景観の構成要素（自然・生活・空間・時間・技術・力・意志）
 - イメージ分析
 - 景観と風景
- 都市開発と都市デザイン（2回）
 - 世界の再開発事例とその手法
- 交通と歩行者空間（1回）
 - 公共交通機関および車と人
 - 歩行という行為および歩行者空間の特性とその計画手法
- 水辺空間（ウォーターフロント）（2回）
 - 都市の水辺空間の歴史と開発事例
- パブリックアートとストリートファニチュア（街具）（1回）
 - 都市におけるパブリックアートの意味と事例
 - 人の行為・行動に応えるストリートファニチュア
- ユニヴァーサルデザインと街づくり（1回）
 - パリアフリーとノーマライゼーション
 - ユニヴァーサルデザインの街づくりの事例

授業運営

民族による都市の姿の違い、都市の魅力とアメニティー、都市整備の考え方と手法等を、国内外の実例を紹介、分析して講義する。資料を配布するとともにスライドを多用して授業を進める。受講生は毎回、自分の考え方をクリアーにするためにコメント（小論文）を提出する。

評価の方法

毎週授業の終了時にレポートを書いて提出し、その総合評価による。

<使用書> 『建築設計資料17 歩行者空間』（建築資料研究社）
<参考書> 加藤 晃・河上省吾共著 『都市計画概論 第2版』（共立出版）
都市計画教育研究会編 『都市計画教科書 第2版』（彰国社）

授業科目	建築デザインⅢ
	Architectural Design Ⅲ
担当者	教授 高橋 志保彦 講師 高谷 時彦 講師 中村 聡
単 位	3

授業内容

建築はそれぞれ、機能、空間、形態、ディメンション、材料を有するが、時間や場所との関係が極めて深い。本科目では、原則として横浜市内に敷地を想定し、課題を設定する。
建築のプログラムを立て、周辺環境の調査分析を行い、人間と建築と都市との関係を捉え、都市空間を考察しながら複合機能を有する建築の計画と設計を行う。

授業計画

- 本授業においては、最初の数週間で4～5名から成るグループで敷地周辺の都市計画的調査分析、および計画プログラムを立て企画書をつくる。その後は個人による計画・設計を行う。
- 課題の説明、敷地周辺分析手法の講義
 - 広域的分析および敷地周辺分析
 - 街並景観分析
 - 空間分析
 - イメージ分析
 - 中心市街地の整備と活性化手法
 - 歴史的考察
 - 21世紀の街づくりの考え方
 - 現地調査
 - 企画書作成および敷地周辺模型制作
 - 企画書提出、講評
 - (以上がグループ作業、以降は個人作業)
 - 設計指導
 - 外部空間についての講義
 - 第1回スケッチ提出
 - 設計指導
 - 建築の形態についての講義
 - 設計指導
 - 設計手法についての講義
 - 中間提出、発表、講評
 - 設計指導
 - 設計手法についての講義
 - 第2回スケッチ提出
 - 作品提出
 - 作品講評

授業運営

各教師により、スライドを多用した講義と、マンツーマンでの設計指導を行う。また横浜市都市計画局都市デザイン室の方による、横浜市の都市デザイン行政についての講義の機会を持ち、アプ・トゥー・デートの情報を得るようにする。
この科目を履修する者は、多くの本を読み、多くの建築を見、都市歩き、それらの特性を考察しなければならない。

評価の方法

提出された作品によって評価を行う。なお、中間と最終提出時に作品についての講評を行う。

<使用書> 授業の中で指示する。
<参考書> 日本建築学会編 『コンパクト建築設計資料集成』（丸善）

伊藤 登
 ITOH NOBORU
 代表幹事

㈱プランニングネットワーク

■7月15日（土）、10：30～12：30、品川区天王洲アイル地区MIビル25階会議室において第10期定例総会が開催された。出席者54名に、有効委任状160通を加えて総数214名の参加（定足数：175名）があった。

■第1号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長及びブロック幹事より第9期の活動及び収支報告があり、承認された。委員会活動では、都市環境デザインに関わる各種セミナー、学生向けセミナー、自治体職員向け講習会、JUDIニュースの発行など外部への情報発信が継続されるとともに、都市環境デザインガイドブックの雑誌「造景」への連載が本年9月号からはじまることなどが報告された。

また、地方ブロックにおいて地元の都市環境に関わる問題に対する意見発表やブロック活動をまとめた冊子の出版とその全国会員への配布、ブロック間活動の胎動がみられるなど、より多様な社会的活動が活性化されたことが報告された。

第9期収支報告については、10周年記念事業費として、既退会者の入会金分640,000円と事業委員会からの1,000,000円を今年度積立金に計上することが報告されるとともに、この収支報告が資料の通り相違ないことが監査役より報告された。

■第2号議案では、新役員の選挙結果として、代表幹事10名、監査役2名が当選したこと、また各ブロック幹事12名が選出されたことが報告され、承認された。

■第3号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長、各ブロック幹事より第10期活動計画及び予算計画の提案があり、承認された。第10期の活動方針としては、①本会の特色を活かした活動の充実、②対社会的な情報発信と交流の促進、③組織運営の改善、④財政基盤の強化、⑤10周年記念事業の遂行、などが提案された。この中で、10周年事業では、11月2～4日に記念イベントを開催、JUDU賞を授与する等が報告されるとともに、積立金と事業委員会からの他事業支援として1,000,000円を予算化することが報告された。また、情報発信及び会員間の効率的な通信手段を考え、具体化する組織として、情報通信特別委員会を組織し、その事業費として450,000円を計上すること、JUDI NEWSの名称変更を行うことなどが報告された。また、会場より、予算配分に対する考えの再考を促す意見が出され、今後検討していくこととなった。

■報告事項として、10周年記念事業についての報告がなされ、その後自由討議を行った。

10周年記念事業としては、前記の事項に加え、記念イベントを関西ブロックのフォーラム委員会とタイアップした形で進めることや協賛金を募ることなどが報告された。また、自由討議の中では、JUDI賞の選考方法に対する意見、表彰対象を空間やまちづくりの担い手としたことなどに対する意見等が出され、JUDI賞委員会が最善の策を講じていくこととなった。その他、学生会員や準会員の会員の募集についての要望が出され、今後の検討課題となった。



第10期定例総会の様子



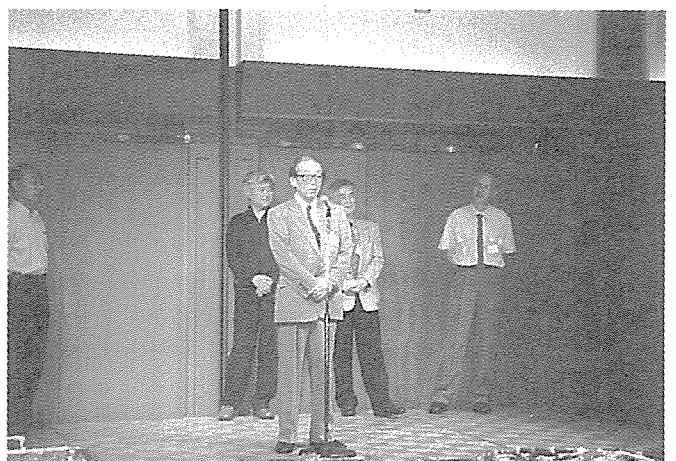
デザインモニターメッセにおける企業の発表



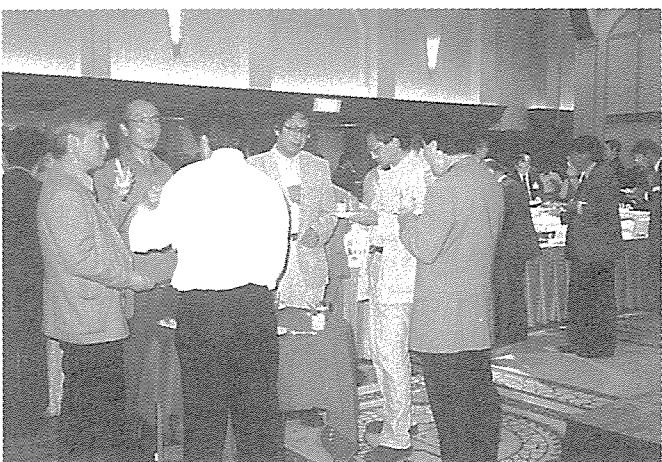
デザインモニターメッセにおける会員からの意見・アドバイス



第3回 JUDI パネルディスカッション。パネリストは左から作山氏、繁野氏、長沼氏、林氏



第8、9期の代表幹事を務められ、挨拶に立つ高橋氏と、後左側から井口氏、吉田氏、谷氏、伊藤氏



懇親会におけるデザインモニターメッセ参加企業や会員による意見交換



懇親会の風景

■東北ブロック

中居 敬一

NAKAI KEIICHI

㈱中居敬一都市建築設計

J U D I 東北ブロック 角館セミナー

市街地視察結果報告

2000. 5. 31

同行者：嶋崎辰雄（㈱嶋崎建築設計事務所
代表取締役）

戸沢嗣郎（かくのだて歴史案内人組
合）

1「火除け」見学

1620年、当時の城主・芦名氏が現在の場所に城下町を移した。3方を山に囲まれ、もう1方は川が流れ、要塞の地としても好条件の地であった。

この時、万一大火が起きてもどちらかが残るという計らいで、「火除け」という大きな広場を設け、ここを境に武士が居住する北側の町「内町」と、商人が居住する南側の町「外町」とに区分した。現在でもほぼ当時のままの町割りが残されている。



火除け地前の写真



横町十字の写真

2「国指定重要伝統的建造物群保存地区・武家屋敷通及び周辺部」見学

小田野家→川原田家→岩橋家→石黒家→
枝垂桜→大村美術館→平福記念美術館→
樺細工伝承館→嶋崎建築設計事務所

武家屋敷通には多くの武家屋敷が並び、一般に公開されている。沿道の塀は黒塗りの板塀に統一され、一般住宅でも調和した景観となるように塀はもちろん、住宅の色や形を統一している。この地区には152本の天然記念物・枝垂桜があり、これは京都の公家三条西家・実号（さねな）の娘が角館

佐竹家二代目に嫁いできた際、嫁入り道具の中に、枝垂桜の苗木が3本入っていたものから増えたと言われている。

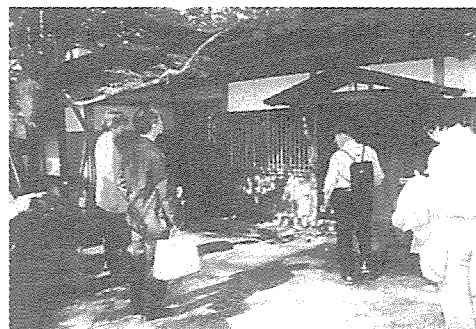
通りには元々歩道が設置されていたが、近年道路改良工事が行われ、段差（歩道）のない歩きやすい道路となっている（将来的に武家屋敷通りは車両の通行を禁止する予定）。道路改良の際に路面を高くしたため、歩いていると塀の上から屋敷の敷地を覗くことができるようになったが、昔は、安全性確保のためにも、通りから屋敷は見えない程度の塀の高さであった。塀のところどころには「武者窓」と呼ばれるスダレのかかった小窓があり、危険がないか見張るために使われていた。

屋敷の庭には大木が多く、それぞれの屋敷にはシンボルツリーがあり、大切にされている。古木が現在でも立派に生長しているのは土が良いため、道路改良工事の際に地面を掘ってみたところ、表面の砂利の下には非常に深い赤土の層が見られた。

屋敷は、豪雪地帯で生活するための様々な工夫がなされており、特徴的なのは、「土縁」という、縁側の外側に雨戸を立て、雪が降っても縁側に雪が積もらず、縁側の空間が断熱層となり、冬でも室内で暖かく過ごすことができるというものである。

一般に玄関は2つあり、正面の大きな玄関は主人よりも身分の高い人が訪れるときや、冠婚葬祭の時のみ使用され、普段は使われることがなかった。（石黒家における話では、現12代当主も11代当主の葬儀以来正面玄関を通ったことがないとのこと）

客間は部屋の2面が庭に面するようにできており、非常に眺めの良い部屋になっている。客間の欄間には透かし彫りが施されており、樺の一枚板に木目を亀が泳ぐときにできる波紋に見立てて彫られており、日の光やろうソクの炎で亀の姿が天井や壁に影絵となってほのかに揺らめく姿を楽しむことができる。



武家屋敷玄関の写真



武者窓の写真



石黒家庭園の写真

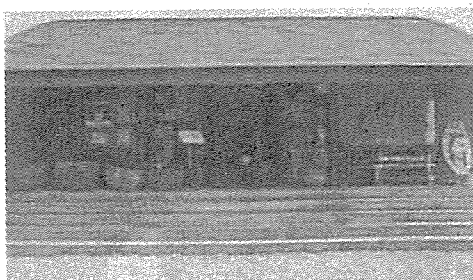


石黒家欄間の写真

「大村美術館」は、大正4年に秋田市で開業した大村洋服店の3代目故大村芳郎とその妻美智子が私財を投じて建立した私立美術館である。江戸、明治、大正、昭和の各時代の家並みと文化を今に残している秋田県角館町に新しいエッセンスを残し伝えたいという夫妻の熱意により平成7年に開業した。

※美術館の建物は大江匡によるもの。

今回は外観のみ見学



大村美術館の写真

「平福記念美術館」は町づくり特別対策事業の一環として建築され、昭和63年4月に開館した。敷地は藩政時代の佐竹北家家臣の屋敷跡で、その後は平福百穂の尽力によって建てられた旧制県立角館中学校の校舎があった場所である。「平福記念美術館」という館名は、角館町出身で近代日本画の巨匠といわれる平福穂庵・百穂父子に由来しているが、本館ではそれとともに日本の洋画の曙光といわれる小田野直武や穂庵・百穂門下の多くの郷土画人の顕彰をしている。※美術館の建物は大江宏によるもの。

今回は外観のみ見学

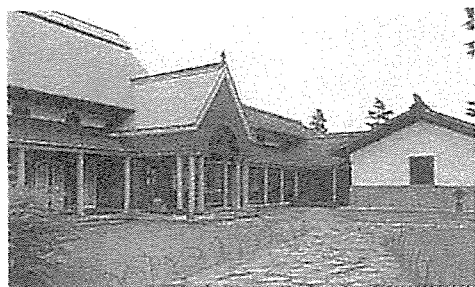


平福記念美術館の写真

「樺細工伝承館」は、特産品の樺細工が伝統的高原品指定（昭和51年2月）を受けたことを機に、その振興を図るために開館されたものである。樺細工は、山桜の木肌を磨いて作る工芸品で、古くは武士の手内職として印籠や胴乱、現在では茶筒作りに200年の伝統と技が活かされている。

※伝承館の建物は大江宏によるもの。

今回は外観のみ見学



樺細工伝承館の写真

3「外町」見学

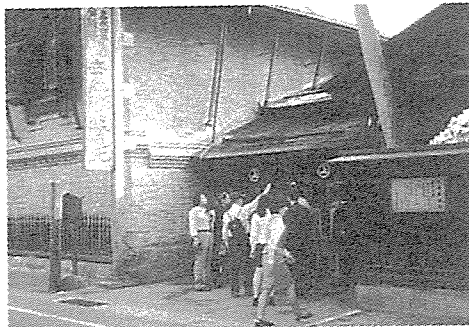
安藤家→西宮家→ほか歴史的建築物等
新潮社記念文学館及び角館町総合情報センター

「安藤家」店内・蔵座敷・文庫蔵見学

安藤醸造元専務・安藤大輔氏による説明

外町に構える安藤家は、江戸時代中頃から味噌・醤油の醸造を始めた地主。建物は

明治時代の建築で、当時としては非常にハイカラな煉瓦造りの蔵座敷がシンボルとなっている。この類としては、東北最古の蔵として町の文化財にも指定されている。当日は、蔵座敷内に5月人形が展示されていた。その人形はバラバラに保存されていたものを集めて展示している、人形を包んでいた新聞が昭和5年のものだったので、それ以来の登場のようです、との説明あり。



安藤家外観の写真



安藤家・蔵座敷の写真

「西宮家」は、外町の田町武家屋敷通りにあり、田町武家屋敷には秋田佐竹氏直臣の今宮家家臣団が居住していた。西宮家はこの家臣団の中でも重きをなした家柄であり、さらに明治後期から大正時代にかけては地主として最も繁栄した。その時代に建てられた5棟の蔵（前蔵、ガッコ蔵、文庫蔵、北蔵、米蔵）と母屋は、西宮家の繁栄を伝えている。これら5棟の蔵と母屋は復元され、第3セクターによって運営されている。



西宮家・庭園の写真



西宮家・北蔵（ミルクホール）の写真

「角館町総合情報センター」は西宮家の向かいに建設されており、武家屋敷の一面としてのムードを壊さないようにと白壁を基調とした蔵風の建物で、瀟洒（しょうしゃ）な中にも落ち着いたムードで武家屋敷のある角館町らしい歴史観を感じさせる。一階は蔵書数9万冊を揃える図書館機能を持たせた学習資料館と休憩室、それに廊下続きで別館のイベント交流館「新潮社記念文学館」からなる。蔵書数は将来20万冊を目指す。文学館は新潮社の初代社長で角館町出身の佐藤義亮氏と今も同社の全刊行物が同町に寄贈され続けている業績を顕彰しようと建設した。館内は角館と佐藤義亮、郷土コーナー、角館と文学作品、新潮社と文人、近代文学の歩み、企画展示コーナー、ミニシアターなどからなり、三島由紀夫の生原稿も展示されており、また正面の壁には新潮文庫第1号として1947年に刊行された川端康成の小説「雪国」の有名な出だしである「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」が掘り刻まれたオブジェが飾られている。※外観のみ見学



総合情報センターの写真



新潮社記念文学館の写真

お知らせ

日本建築学会第25回水環境シンポジウム 「雨水循環を育む建築づくり・まちづくり ／その技術と施策を考える」 ～産・官・学・民の現状と連携～

21世紀に向けた循環型社会づくりをめざす中で、健全な水循環を回復することは、今日の大きな目標である。雨水循環は、その手がかりの一つであり、建築に関わる重要な視点である。これからの建築に求められる役割は、雨水の貯留、利用、浸透にとどまらず、雨水そのものを建築でコントロールすることである。

建築が雨を育む、という位置づけのもとに書かれた「雨の建築学」（日本建築学会編）の出版に伴い、その主旨を広く伝えてゆくためにシンポジウムを開催する。本書で述べてきたことは、建築と雨との関わりを見直すことであり、建築づくり、まちづくりを通して雨水循環を育むことをめざしている。

午前中はセミナーとして、雨水循環の技術的な側面に焦点を当て、最新の取り組みを展示しつつ紹介する。午後のシンポジウムでは、ドイツにおける雨水利用、循環へのユニークな取り組み方を紹介し、これを踏まえて日本の雨水に関わる業界や学会のあり方、及び施策面の整備など、今後の課題について検討する。

1. 日時：12年11月25日（土）
10:00～12:00 技術セミナー、
13:30～17:00 シンポジウム、
17:30～ 懇親会、展示紹介

2. 会場：日本建築学会 建築会館ホール

3. 会費：一般3,000円、会員2,000円、学生1,000円／資料代を含む
懇親会費 別途 3,000円

4. 内容：

<技術セミナー>

日本及びドイツの雨水循環技術の紹介
忌部正博（雨水浸透貯留協会）
徳永暢夫（雨水利用事業者の会）
ユルゲン・ヴィッチシュトック（エコネックス）
コーディネーター
黒岩哲彦（黒岩哲彦建築設計事務所）

<シンポジウム>

基調講演

クラウス・ケーニッヒ（建築家、f b r 理事／ドイツ雨水利用循環協会）

「ドイツにおける雨水利用循環の事例と政策」

パネリスト

鈴木信宏（東京理科大学教授）

「雨の建築学について」

村瀬 誠（雨水利用を進める全国市民の会事務局長）

「雨水利用の推進と市民の活動」

細見 寛（建設省京浜工事事務所長）

「健全な水循環と雨水」

コーディネーター

神谷 博（法政大学及び日本大学講師）

<懇親会>

懇親及び展示物の紹介

5. 主催：日本建築学会（環境工学委員会
水環境小委員会 雨水の系ワーキンググループ）

後援：日本都市計画学会、日本造園学会、都市環境デザイン会議、建設省、東京都、墨田区、雨水貯留浸透技術協会、日本河川協会、雨水利用事業者の会、日本建築家協会、東京建築他の予定

1. 新会員の紹介

2000年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、527名です。

氏 名	勤 務 先
波々伯部隆 塚本 俊明 倉本 宏	(株)アール・アイ・エー大阪支社 (株)都市環境研究所広島事務所 (株)倉本都市建築ラボラトリー

2. 退会者(2000年5月～6月)

川口卓行、高須喜久男、武長憲二、柘植喜治、沼達賢一(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏 名	変 更 内 容 (新)
飯村 博	(株)アイシーエム企画 〒151-0073 東京都渋谷区笹塚2-18-3 Tel&Fax変更なし
浦田 健司	(株)浦田計画設計 〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-2-33-701 Tel&Fax変更なし
岡田 秀夫	(株)住軽日軽エンジニアリング 〒136-0071 東京都江東区亀戸2-35-13 Tel. 03-5628-8500 Fax03-5628-8505
海老 陽三	(株)白邦コンサルタント 〒920-0365 金沢市神野町東68 Tel&Fax変更なし
澤 一寛	(株)日本カラーテクノロジー研究所 〒542-0081 大阪市中央区南船場2-7-13-502 Tel. 06-6265-3211 Fax06-6265-3631
外園 勝	(株)SOTO設景室 〒574-0026 大東市住道2-7-12-205 Tel. 072-869-5250 Fax072-869-5255
谷口 庄一	日本工営(株)名古屋支店 〒460-0008 名古屋市中区栄2-6-1 Tel. 052-220-2682 Fax052-220-2685

編集後記

今月号の特集テーマが「環境デザイン教育」ということになり、会員名簿より各種教育機関の専任教員を調べましたら、60名程となりました。又、非常勤講師の方も含めると倍以上となりますでしょうから、全会員の1/3～1/2程が何かしら「環境デザイン教育」に関わっているのが現況の様です。しかしながら各々の教育現場は理想的状況にあるわけではなく、様々な難問があるようです。それらを今回の特集で明らかにし、将来に向けてより良い教育環境と人材育成の為の一助になれば幸いです。(中嶋 猛夫)

毎年、この時期の号は運悪く夏休みにかかってしまい発行がどうしても遅れがちとなるのが悩みのタネです。今年こそは、と意気込んでいたのですが、結局は例年どおりとなっていました。やむなく原稿の督促(?)をさせていただいたのですが、海外出張の方には帰国を見計らって、あるいは研究室につながらない方には会員名簿

を頼りにご自宅にまで電話をおかけして、大変お騒がせしました。その成果がこの特集号です。「自分ひとりで環境デザインの講座を持っているので、書きづらい」と辞退された方もいらっしゃいました。実際にはこのような事例もかなりあるのではと思います。今回の特集が教育現場の方々には何らかのヒントになれば幸いです。

(松村 みち子)

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康